史跡 五色塚古墳 小壺古墳

発掘調査・復元整備報告書

2006年3月

神戸市教育委員会

五色塚古墳と明石海峡大橋（2005.12）

復元された出土埴輪群

史跡 五色塚古墳　小壺古墳

発掘調査・復元整備報告書

2006年3月

神戸市教育委員会

序

五色塚古墳は、兵庫県下最大の前方後円墳で、隣接する小壺古墳とともに、大正10年に国の史跡に指定されました。第二次世界大戦中・戦後に樹木伐採や畑として開墾され、著しく荒廃しました。文化財保護委員会（現文化庁）は、荒廃した古墳を「築造当時の姿に戻し、野外博物館とする」という、かつて例のない事業を計画し、神戸市は補助金を得て、昭和40年度に開始しました。10年の歳月と多額の費用を費やし、昭和50年に完成しました。その後、歴史教科書に掲載され、市内をはじめ遠方からも多くの人々が訪れる史跡公園として、また平成10年に開通した明石海峡大橋を望む名所として、現在も広く親しまれています。

一方、古墳の調査成果の報告書刊行については、調査終了直後に計画され、着手されましたが、高度経済成長に伴う発掘調査量の増加に伴い、調査員の確保が困難になり中断をしていました。そして、阪神・淡路大震災の復興事業に伴う発掘調査も一段落した平成14年度から、文化庁の補助事業として、厖大な記録類と大量の埴輪等の再整理を開始し、環境整備事業完成から30年を経た本年、ようやく報告書を刊行する運びになりました。

これらの成果をもとに、環境整備事業完成当時からの課題であった、五色塚古墳北および東側の整備と、傷みの激しくなってきた古墳の再整備に向けて努力してまいりたいと考えております。

最後になりましたが、文化庁はじめ、本書の刊行にご協力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

平成18年3月
神戸市教育委員会
教育長　小　川　雄　三

例　言

本書は、神戸市垂水区五色山4丁目に所在する「史跡五色塚古墳　小壺古墳」の発掘調査・復元整備報告書である。

1. 発掘調査および遺物整理事業は国庫補助事業として実施し、文化庁と兵庫県から補助金を得て、神戸市教育委員会が主体となり実施した。本報告書作成に関わる出土遺物および記録類の整理作業は平成14～16年度に、報告書の作成・発行は平成17年度に実施した。なお、整理後の出土遺物・実測図・写真等は、神戸市教育委員会が所蔵・保管している。
2. 昭和40～52年度までの発掘調査・復元整備事業に携わった担当者は、第3章　表3-1に記した通りである。
   復元整備後の周辺の範囲確認調査等に携わった担当者は、第4章　表4-1に記した通りである。
3. 本報告書作成に関わる整理作業は、神戸市教育委員会　丸山潔、平田朋子が担当し、埴輪等の実測作業は第3章で詳述するように、三次元デジタイザーを用い、丸山・平田がすべての出土遺物を実測した。
4. 本書の執筆は、丸山・平田が主として行ったが、埴輪に関する詳細な分析は廣瀬覚氏に依頼し、その成果は第5章5および第6章に掲載した。
   また、埴輪に塗布された赤色顔料の分析については志賀智史氏・本田光子氏に依頼し、その成果は第7章に掲載した。
   墳丘の葺石および関連石材の分析については先山徹氏に依頼し、その成果は第7章に掲載した。
5. 五色塚古墳環境整備事業の契機をつくられ、整備事業を推進された坪井清足氏と、整備事業の専門委員であられた檀上重光氏には、五色塚古墳をはじめ当時の文化財に関するテーマで、貴重な対談をしていただき、その内容は第10章に掲載した。
6. 本書掲載写真のうち、遺構写真撮影は調査担当者によるものである。遺物写真撮影は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　牛嶋茂氏および同氏指導のもとに杉本和樹氏（西大寺フォト）と丸山が行った。なお、第7章の写真は、各執筆者によるものである。
7. 本書に使用した標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を、方位・座標については日本測地系第Ⅴ系座標を使用している。
8. 第1章　図1-4は、国土地理院発行5万分1地形図「神戸」「須磨」「高砂」「明石」を使用した。
9. 五色塚古墳の発掘調査・復元整備に関する成果については、1970年「史跡五色塚古墳環境整備事業　中間報告Ⅰ」、1975・1982年「史跡五色塚古墳復元・整備事業概要」で、その概要が報告されていたが、今回の再整理作業の結果、一部異なる点が見出された。
10. 今回の再整理事業に際し、文化庁、兵庫県教育委員会をはじめ、多くの機関や方々にご指導、ご協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）
    明石市立文化博物館　神戸市立中央図書館　神戸市立博物館　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
    石島三和　稲原昭嘉　大井高志　置田雅昭　小野田一幸　口野博史　小浜　成　篠宮　正
    高久智広　檀上重光　千種　浩　坪井清足　春成秀爾　深井明比古　松下泰造　松下まり子
    森下章司　森下大輔　山下俊郎

昭和40年度の発掘調査開始以来、毎年多くの中・高・大学生が、調査補助員として参加していたが、いちいちその氏名を掲げることができなかった。しかし、この報告書はそれら多くの人々の努力の結晶であることを、あらためてここに記し、感謝したい。
なお、報告書作成過程で、神戸市教育委員会文化財課主査　安田滋には、終始協力を得た。

目　　次

巻頭図版
扉
序
例言
目次

第1章　位置と環境……（平田朋子）1
　1. 五色塚古墳の位置……1
　2. 五色塚古墳周辺の地理的環境……1
　3. 五色塚古墳周辺の歴史的環境……3
第2章　古文献に見る五色塚古墳……（丸山潔）13
　1. 江戸時代およびそれ以前の文献……13
　2. 埋葬施設について……16
　3. 埴輪について……17
　4. 葺石について……20
　5. 墳丘規模について……21
　6. 附近の古墳について……22
　7. 濠の中の島状遺構……24
第3章　調査と整理作業の経過……33
　1. 調査の経過……（丸山）33
　2. 整理作業の経過……（平田）39
第4章　調査成果……（丸山・平田）43
　1. 墳丘……43
　2. 葺石……49
　3. 周濠……57
　4. 埴輪列……59
　5. 周辺部の範囲確認調査……68
　6. 小結……77
第5章　出土遺物……（平田）79
　1. はじめに……79
　2. （鰭付）円筒埴輪・（鰭付）朝顔形埴輪……80
　3. 形象埴輪……120
　4. その他の遺物……122
　5. 埴輪の黒斑とその特色……（廣瀬覚）226
第6章　五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産……（廣瀬）239
　1. 五色塚古墳出土埴輪の特徴……239
　2. 五色塚古墳の埴輪生産組織像……241
　3. 周辺古墳出土埴輪との関係……246
　4. Ⅱ群鰭付円筒埴輪の型式組列……248
　5. 五色塚古墳出土埴輪の年代と系譜……252

第７章　自然科学分析 ……257
五色塚古墳出土埴輪に付着する赤色顔料について ……（志賀智史・本田光子）257
神戸市五色塚古墳出土の石材産地同定に関する調査……（先山徹）267
第８章　総括 ……（丸山）285
1. はじめに……285
2. 墳丘……286
3. 周濠・周溝……286
4. 島状遺構……288
5. 葺石……288
6. 埴輪……290
7. 埋葬施設……293
8. 五色塚古墳の歴史的位置……294
第９章　復元整備 ……（丸山）301
1. 復元整備の契機 ……301
2. 墳丘の復元整備 ……309
第10章　対談　五色塚古墳の復元整備とその時代背景 ……（坪井清足・檀上重光）333

巻頭図版目次

巻頭図版1　五色塚古墳と明石海峡大橋
巻頭図版2　復元された出土埴輪群

写真図版目次

図版1　1．五色塚古墳と明石海峡大橋(2005.12)
2．五色塚古墳と摂播国境の山並(2005.12)
図版2　1．五色塚古墳と小壺古墳(北から明石海峡と淡路島を望む)
2．東方から播磨灘を望む(2005.12)
図版3　1．新旧の葺石で復元された墳丘
2．新たに購入した石で葺かれた後円部
図版4　1．後円部墳頂の復元埴輪列
2．後円部墳頂から見た小壺古墳と明石海峡大橋
図版5　1．発掘調査中の前方部(1968年頃)
2．発掘調査中の西側くびれ部(1967年頃)
図版6　1．発掘調査中の東側くびれ部(1971年頃)
2．発掘調査中の東側くびれ部(1974年頃)
図版7　復元された出土埴輪群
図版8　1．10(BNWⅡ2)
2．34(FEⅡ38)
3．90(FEⅣ3)
4．74(FEⅣ1)
図版9　1．119(WくⅢ29)
2．171(WくⅢ26)
3．165(EくⅢ5)
4．166(WくⅢ20)
図版10　1．191(FEⅣ4)
2．194(NEマウンド埴輪棺1)
3．199(BSWⅢ4)
4．201(FWⅣ6)
図版11　1．227(FEⅡ30)
2．229(FEⅡ33)
3．239(BSWⅢ2)
4．240(EくⅡ18)
図版12　1．134(FEⅡ18)
2．117(WくⅢ16)
3．191(FEⅣ4)
4．239(BSWⅢ2)
5．200(BSWⅢ3)
6．45(EくⅡ19)
図版13　1．家形埴輪(328)
2．家形埴輪(384)
3．家形埴輪(383)
図版14　1．土師器
2．子持勾玉
図版15　五色塚古墳・小壺古墳垂直写真(1960.5)
図版16　1．五色塚古墳空中写真(1962年頃)
2．五色塚古墳空中写真(1962年頃)
3．五色塚古墳・小壺古墳空中写真(1960年以前)
図版17　1．五色塚古墳(北東の病院屋上から　1965.11)
2．五色塚古墳(北西の小壺古墳から　1965.11)
3．五色塚古墳(南西から　1965.11)
4．小壺古墳(北東から　1965.11)
図版18　五色塚古墳・小壺古墳垂直写真(1966.9)
図版19　1．前方部墳頂(北から)
2．前方部墳頂(南から)
図版20　1．前方部西側斜面葺石と埴輪列
2．前方部西側斜面上段埴輪列と基底石列
3．前方部西側斜面中段埴輪列と葺石
図版21　1．前方部南西角付近中段
2．前方部西側斜面上段先端付近の二列の基底石列
3．前方部西側斜面の葺石復元工法実験
図版22　1．前方部南側斜面上・中段
2．前方部南側通路状遺構
3．前方部南側通路状遺構
4．前方部南側通路状遺構
図版23　1．前方部東側斜面(南から)
2．前方部東側斜面(北から)
図版24　1．前方部東側中段埴輪列(北から)
2．前方部東側中段埴輪列(南から)
3．前方部東側斜面(北東から)
図版25　1．前方部東側斜面葺石(東から)
2．前方部東側中段埴輪列(北から)
3．前方部東側上段埴輪掘形(南から)
図版26　1．西側くびれ部(北から)
2．西側くびれ部上段基底石列(東から)
3．西側くびれ部上段基底石列(南西から)
図版27　1．西側くびれ部墳頂と上段(南東から)
2．西側くびれ部墳頂埴輪列と基底石列(南東から)
図版28　1．東側くびれ部(南西から)
2．東側くびれ部下段と島状遺構(北から)
図版29　1．東側くびれ部下段と島状遺構(北から)
2．東側くびれ部下段葺石(東から)
3．東側くびれ部下段と島状遺構間の堆積
4．島状遺構西斜面の葺石(西から)
図版30　1．東側くびれ部上段埴輪列(東から)
2．東側くびれ部埴輪掘形(東から)
3．東側くびれ部埴輪列と葺石(西から)
図版31　1．東側くびれ部中段埴輪列(東から)
2．東側くびれ部中段埴輪掘形(東から)
3．後円部西側トレンチ上段埴輪列(西から)
図版32　1．後円部西トレンチ上段埴輪列(北から)
2．後円部南西トレンチ下段葺石
3．後円部北トレンチ下段葺石
4．後円部南東の最下段葺石(南から)
図版33　1．北東(NE)マウンド(北から)
2．北東(NE)マウンド(西から)
図版34　1．西側くびれ部暗渠状遺構(西から)
2．西側くびれ部暗渠状遺構
3．西側くびれ部暗渠状遺構(北から)
4．西側くびれ部暗渠状遺構
5．東側くびれ部下段暗渠状遺構(南から)
6．東側くびれ部下段暗渠状遺構礫充填状況
図版35　1．東くびれ部上段埴輪埋置状況
2．前方部東側上段埴輪埋置状況
3．東くびれ部中段柱穴
4．東くびれ部中段柱穴
5．後円部南東トレンチ中段断ち割り
図版36　1．第2次調査　G2トレンチ周溝
2．第2次調査　外堤埴輪
3．第4次調査　6トレンチ周溝(北から五色塚古墳を望む)
4．第4次調査　7トレンチ周溝(北から)
5．第4次調査　8トレンチ周溝(東から)
図版37　1．第4次調査　9トレンチ小壺古墳周濠(西から)
2．第4次調査　9トレンチ五色塚古墳周溝と小壺古墳周濠(北西から)
図版38　1．第4次調査　10トレンチ周溝(北から)
2．第5次調査　5トレンチ周溝と埴輪片
3．第4次調査　11トレンチ周溝(西から)
4．第9次調査　周溝(東から)
5．第5次調査　11トレンチ周溝(南から)
図版39　初期の整備工事
1．前方部西側の復元(南から)
2．前方部西側の復元(北から)
3-1．埴輪溝を掘削し底にトラフを入れる
3-2．掘形に礫を入れ暗渠排水溝にする
3-3．斜面の雨水を受けるトラフを設置する

3-4．雨水が透過するようテラス面に礫を敷く
3-5．斜面に石を葺く
図版40　後円部の整備工事
1．整備工事中の後円部
2．後円部上段までベルトコンベアーで真砂土を上げる
図版41　1．購入した礫を一輪車で桟橋を渡り搬入
2．盛土上を丁張を目安に礫を葺く
3．下段は盛土に筋芝
4．各段テラスは二和土の叩き締め
5．周濠外側斜面はシガラミに盛土・筋芝
6．階段は盛土内で処理
7．周囲は擬木・ネットフェンスに植栽
図版42　1．後円部墳頂の埴輪列
2．説明板の設置
3．後円部北東の島状遺構（北東マウンド）
4．東くびれ部の島状遺構（東マウンド）
5．盛土・筋芝で整備された小壺古墳
図版43　1～3．竣工後の五色塚古墳
図版44　1．1（FEⅡ59）
2．4（FEⅢ9）
3．10（BNWⅡ2）
4．18（FEⅡ56）
図版45　1．21（FEⅡ50）
2．26（FEⅡ24）
3．32（FEⅡ27）
4．34（FEⅡ38）
図版46　1．38（Eく Ⅱ7）
2．74（FEⅣ1）
3．76（Wく Ⅲ30）
4．78（FEⅡ100）
図版47　1．90（FEⅣ3）
2．101（FWⅣ2）
3．102（Wく Ⅲ31）
4．103（Eく Ⅲ18）
図版48　1．104（FEⅡ126）
2．113（Eく Ⅲ17）
3．114（Wく Ⅲ28）
4．119（Wく Ⅲ29）
図版49　1．125（Wく Ⅲ27）
2．128（FEⅣ2）
3．130（FEⅡ125）
4．131（FEⅡ127）
図版50　1．134（FEⅡ18）
2．171（Wく Ⅲ26）
3．165（Eく Ⅲ5）
4．166（Wく Ⅲ20）
図版51　1．173（FEⅡ41）
2．184（FEⅡ95）
3．191（FEⅣ4）
4．192（FEⅡ46）
図版52　1．193（BWⅢ2）
2．194（NEマウンド埴輪棺1）
3．199（BSWⅢ4）
4．200（BSWⅢ3）
図版53　1．201（FWⅣ6）
2．203（FEⅡ111）
3．204（FWⅣ3）
4．211（Wく Ⅲ9）
図版54　1．212（FEⅡ42）
2．214（Wく Ⅲ7）
3．220（FEⅡ31）
4．221（FEⅡ61）
図版55　1．223（FEⅡ117）
2．224（Eく Ⅱ0）
3．227（FEⅡ30）
4．229（FEⅡ33）
図版56　1．239（BSWⅢ2）
2．240（Eく Ⅱ18）
3．242（2次調査）
4．243（5次調査）
図版57　1．1（FEⅡ59）口縁部
2．10（BNWⅡ2）口縁部
3．18（FEⅡ56）口縁部
4．21（FEⅡ50）口縁部
図版58　1．26（FEⅡ24）口縁部
2．34（FEⅡ38）口縁部
3．36（FEⅡ48）口縁部
4．38（Eく Ⅱ7）口縁部
図版59　1．90（FEⅣ3）口縁部
2．101（FWⅣ2）口縁部
3．102（Wく Ⅲ31）口縁部
4．171（Wく Ⅲ26）口縁部
図版60　1．103（Eく Ⅲ18）口縁部
2．104（FEⅡ126）口縁部
3．113（Eく Ⅲ17）口縁部
4．125（Wく Ⅲ27）口縁部
図版61　1．131（FEⅡ127）口縁部
2．134（FEⅡ18）口縁部
3．173（FEⅡ41）口縁部
4．184（FEⅡ95）口縁部
図版62　1．191（FEⅣ4）口縁部
2．194（NEマウンド埴輪棺1）口縁部
3．199（BSWⅢ4）口縁部
4．200（BSWⅢ3）口縁部
図版63　1．201（FWⅣ6）口縁部
2．203（FEⅡ111）口縁部
3．204（FWⅣ3）口縁部
4．211（Wく Ⅲ9）口縁部
図版64　1．212（FEⅡ42）口縁部
2．223（FEⅡ117）口縁部
3．220（FEⅡ31）口縁部
4．221（FEⅡ61）口縁部
図版65　1．224（Eく Ⅱ0）口縁部
2．227（FEⅡ30）口縁部
3．229（FEⅡ33）口縁部
4．239（BSWⅢ2）口縁部
図版66　1．74（FEⅣ1）口縁部
2．165（Eく Ⅲ5）口縁部
3．166（Wく Ⅲ20）口縁部
図版67　1．181（FEⅡ120）
2．186（FEⅡ107）
3．187（FEⅡ32）
4．190（BWⅢ1）
5．213（FEⅡ96）
6．238（FEⅡ103）
図版68　1．75（FWⅣ1）
2．76（Wく Ⅲ30）
3．77（FEⅡ112）
4．78（FEⅡ100）
図版69　1．75（FWⅣ1）
2．77（FEⅡ112）
3．168（FEⅡ131）
4．188（FEⅡ64）
5．246（FEⅢ1）
6．246（FEⅢ1）
7．84（Wく Ⅲ15）
図版70　口縁部の記号（1）
1．（FEⅡ59）
2．16（FEⅡ39）
3．21（FEⅡ50）
4．23（Eく Ⅱ23）
5．134（FEⅡ18）
図版71　口縁部の記号（2）
1．117（Wく Ⅲ16）
2．118（Wく Ⅲ18）
3．120（Eく Ⅲ26）
4．122（BSEⅢ2）
5．123（FEⅢ2）

図版72　口縁部の記号(3)
1．33(FEⅡ71)
2．34(FEⅡ38)
3．36(FEⅡ48)
4．14(FEⅡ63)
5．5(FEⅡ74)
6．上35(FEⅣ5)・下30(EくⅡ9)
図版73　口縁部の記号(4)
1．113(EくⅢ17)
2．114(WくⅢ28)
3．211(WくⅢ9)
4．239(BSWⅢ2)
5．38(EくⅡ7)
6．191(FEⅣ4)
図版74　口縁部の記号(5)
1．210(BNⅣ4)
2．209(FWⅣ10)
3．202(FWⅣ4)
4．215(FWⅣ12)
5．90(FEⅣ3)
6．200(BSWⅢ3)
図版75　口縁部の記号(6)
1．横矢羽
2．縦矢羽
3．縦線
4．山形・その他
図版76　底部の記号(1)
1．2(FEⅡ36)
2．22(FEⅡ20)
3．26(FEⅡ24)
4．74(FEⅣ1)
5．65(EくⅡ2)
6．65(EくⅡ2)
図版77　底部の記号(2)
1．295(KS第1トレンチ)
2．91(BEⅡ2)
3．224(EくⅡ0)
4．225(EくⅡ10)
5．229(FEⅡ33)
6．206(EくⅡ29)
図版78　底部の記号(3)
1．118(WくⅢ18)
2．119(WくⅢ29)
3．132(WくⅢ3)
4．133(FEⅡ128)
5．169(EくⅢ19)
図版79　その他の記号(1)
1．45(EくⅡ19)
2．317(EくⅢ5)
3．95(BNWⅢ2)
4．127(EくⅢ33)
5．その他の記号
図版80　その他の記号(2)
1．76(WくⅢ30)鰭部
2．230(EくⅡ20)鰭部
3．鰭部の線刻
4．その他の記号(朝顔形埴輪)
図版81　突帯間隔設定技法(1)
1．突帯剥離面の刺突　134(FEⅡ18)
2．突帯剥離面の刺突　135(FEⅡ49)
3．突帯剥離面の刺突　199(BSWⅢ4)
4．突帯剥離面の刺突　240(EくⅡ18)
図版82　突帯間隔設定技法(2)
1．突帯剥離面の凹線　26(FEⅡ24)
2．突帯剥離面の凹線　32(FEⅡ27)
3．突帯剥離面の凹線　91(BEⅡ2)
4．突帯剥離面の凹線　221(FEⅡ61)
5．突帯剥離面の凹線　224(EくⅡ0)
図版83　突帯間隔設定技法(3)
1．突帯剥離面の刺突のちヨコナデ　102(WくⅢ31)
2．突帯剥離面の刺突のちヨコナデ　208(EくⅡ26)
3．突帯剥離面の刺突のちヨコナデ　148(EくⅢ15)
4．突帯剥離面の刺突のちヨコナデ　(No.不明)
図版84　突帯間隔設定技法(4)
1．突帯剥離面のヨコナデ　33(FEⅡ71)
2．突帯剥離面のヨコナデ　29(FEⅡ19)
3．突帯剥離面のヨコナデ　223(FEⅡ117)
4．突帯剥離面のヨコナデ　191(FEⅣ4)
図版85　鰭の接合方法(1)
1．縦線　199(BSWⅢ4)
2．縦線　10(BNWⅡ2)
3．縦線　221(FEⅡ61)
4．縦線　11(FEⅡ123)
5．縦線+乱れ　79(WくⅢ25)
6．縦線+乱れ　33(FEⅡ71)
7．縦線+乱れ　34(FEⅡ38)
8．縦線+乱れ　191(FEⅣ4)
図版86　鰭の接合方法(2)
1．V字　141(WくⅢ19)
2．V字　10(BNWⅡ2)
3．斜格子　114(WくⅢ28)
4．斜格子　8(BWⅢ9)
5．斜格子　206(EくⅡ29)
6．縦線+斜格子　95(BNWⅢ2)
7．斜線　109(WくⅢ22)
8．斜線　37(FEⅡ54)
図版87　鰭の接合方法(3)
1．縦線+平行刺突　90(FEⅣ3)
2．平行刺突　178(FEⅡ72)
3．刺突　93(FEⅡ53)
4．刺突　98(EくⅡ1)
5．刺突　239(BSWⅢ2)
6．刺突　18(FEⅡ56)
7．無　36(FEⅡ48)
8．無　36(FEⅡ48)
図版88　成形(粘土紐・内面調整)
1．25(FEⅡ25)内面
2．25(FEⅡ25)断面
3．173(FEⅡ41)内面
4．87(FEⅡ52)内面
5．134(FEⅡ18)内面
6．214(WくⅢ7)透孔内面
図版89　朝顔形埴輪口縁部成形
1．二次口縁下端　76(WくⅢ30)
2．一次口縁上端　76(WくⅢ30)
3．一次口縁上端　76(WくⅢ30)
4．口縁接合部　167(FEⅡ70)
5．口縁接合部　167(FEⅡ70)
6．二次口縁　78(FEⅡ100)
7．一次口縁上端　78(FEⅡ100)
図版90　1．蓋形埴輪(342)
2．蓋形埴輪(347)
3．蓋形埴輪(347)
4．蓋形埴輪　立飾り(361)
図版91　盾形埴輪
図版92　1．靫形埴輪
2．靫形埴輪
3．形象埴輪
図版93　家形埴輪
図版94　1．土師器
2．土師器(409)
3．土製品(407)
4．土製品(408)
5．須恵器(412)
6．蛸壺(415)

第１章　位置と環境

１. 五色塚古墳の位置

五色塚古墳は、神戸市垂水区五色山に所在する。神戸市の南西部に位置する垂水区は、六甲山系の西に続く丘陵地にあたり、阪神間のベッドタウンとして、多くの人々が生活する住宅地である。

瀬戸内海に面する海岸線は、付近で最も南に突き出ていて、淡路島を指呼の間に望むことができ、古くから風光明媚な場所として親しまれている。

平成10年には明石海峡大橋が完成し、それに伴い五色塚古墳前方の海岸は埋め立てられ、人工砂浜による海水浴場や集客施設が建ち並び、新たな観光地として注目を集めている。

五色塚古墳は、眼下に海が迫る段丘の先端に前方部を南に向けて築かれている。古墳のすぐ南には、山陽電鉄、山陽本線、国道２号線が走り、周囲を見渡す限りの住宅に囲まれる中、今なお圧倒的な存在感を持って位置している。

明治19年の仮製地形図（図1-2）によると、前方部の先端から海岸線までの距離は約100mであるが、近年の海岸の埋め立て工事により、現在の海岸線からは約300mも離れてしまった。そのため、現在の海岸から古墳を眺めると、建物と建物の間に前方部の一部が見えるのみである。

五色塚古墳は古代律令制以降の旧国では播磨国に属するが、東方の摂津国、明石海峡を隔てた淡路国との旧三国の国境付近に位置する。また、摂津、播磨をつなぐ古代からの道に面していたと考えられ、墳頂からは明石海峡を行き交う船を一望でき、まさに海陸交通の要衝に位置する古墳である。

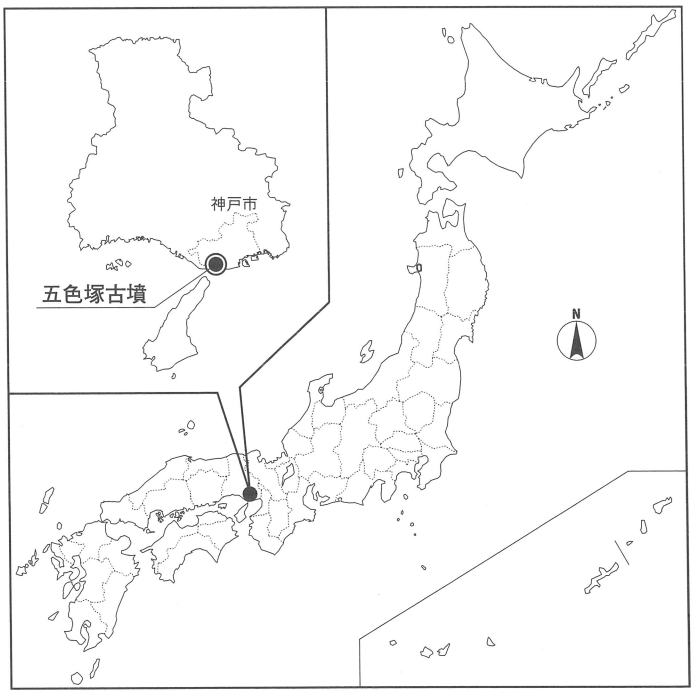

図１-１　五色塚古墳の位置

2. 五色塚古墳周辺の地理的環境

古墳の所在する神戸市垂水区周辺は、六甲山地と播磨平野を隔する高塚山断層の西側にあたり、多様な地質環境を示している。

高塚山断層の東側には標高の高い神戸層群が分布し、六甲山地へと連なっている。これより西側は大阪層群（明石累層）に覆われ、標高100m前後の段丘が広がっている。

この六甲山西端から加古川付近に発達した段丘には、第四紀の間氷期（温暖期）の海進

図１－２　明治19年測量の五色塚古墳と周辺地形図

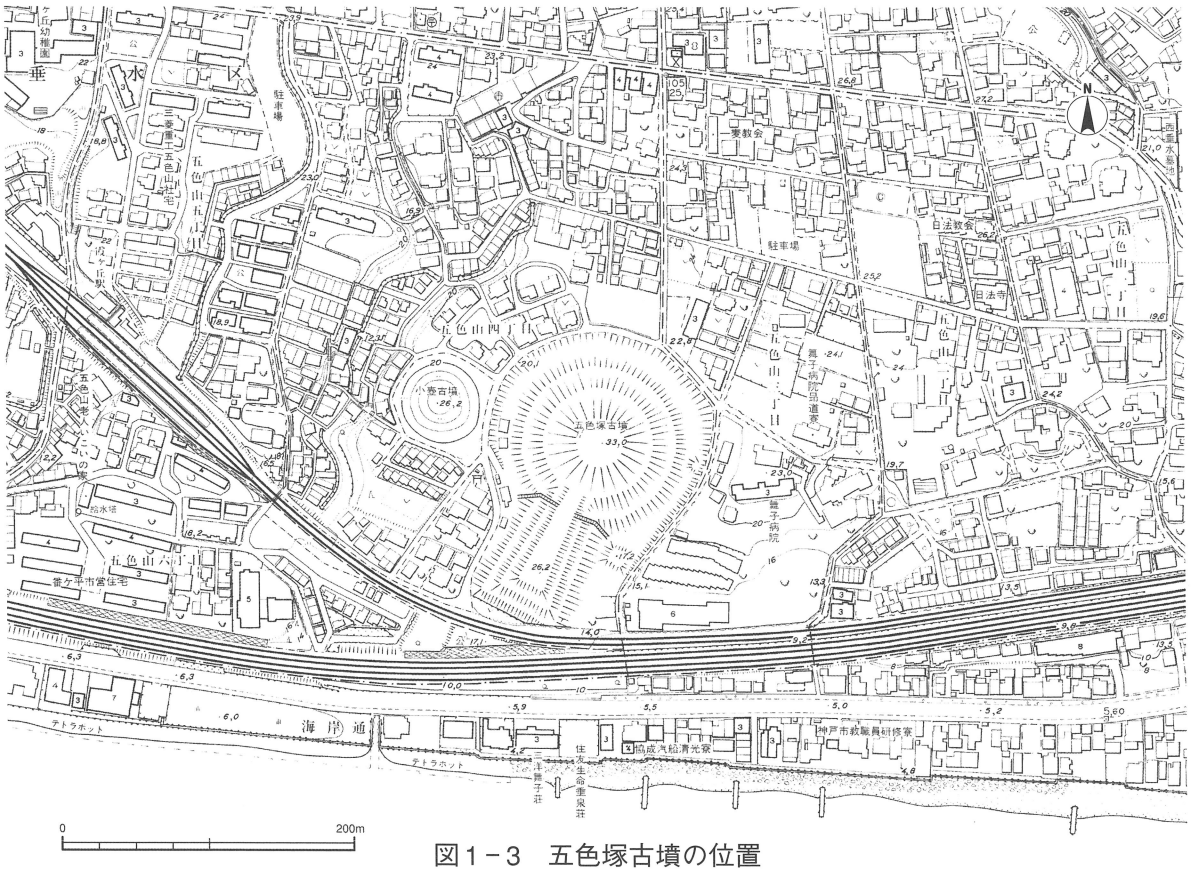

図１－３　五色塚古墳の位置

の影響によるものがあり、古墳付近に見られる西八木層もその一つである。

こうした海成層には高塚山貝層のように貝化石を多産する層が知られるが、海成層に含まれる珪藻や火山灰の分析、有孔虫の酸素同位体の分析等からその年代が求められている。

これによれば、西八木層はなかでも新しい年代のものであることが分かっている。

このように五色塚古墳は海成段丘の先端に位置するが、これらの段丘は潅漑が困難なため、水田には不向きであったようで、図1-2によると明治中頃には、古墳周辺は松林、その周囲は畑として利用されていたことが分かる。また、段丘上にはいくつかの開析谷があり、五色塚古墳をはさむ東西にも大きな開析谷が確認できる。現在、この段丘上は宅地開発によりほぼ平坦に造成されていて、旧地形をとどめる所はないが、古墳築造にあたり、これらの開析谷が利用されたものと考えられている。

〈参考文献〉

神戸市企画局 1971『六甲山地とその周辺の地質』神戸市および隣接地域地質図（5万分の1）説明書

神戸市教育委員会　1975『神戸市内の化石産地の調査－特に神戸層群の植物化石産地について－』

高橋　学　1992「垂水・日向遺跡の地形環境分析－福田川流域の地形環境Ⅰ－」『垂水日向遺跡第1，3，4次調査』神戸市教育委員会 財団法人神戸市スポーツ教育公社

3. 五色塚古墳周辺の歴史的環境

五色塚古墳の所在する垂水の沿岸部一帯は段丘が直接海に落ち込む地形のため、生産基盤となる可耕地が少なく、周辺に所在する遺跡は多くない。そのためここでは、大規模遺跡が密集する明石川流域も含めて、周辺の主要な遺跡を概観する。

旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺構を伴う遺跡は現在のところ確認されておらず、舞子古墳群（1）の毘沙門2号墳、大歳山遺跡（2）、野々池遺跡（3）などでナイフ形石器等の採集ないし出土が知られるのみである。名谷遺跡（4）、青谷遺跡（5）、高津橋大塚遺跡（6）、玉津田中遺跡（7）、野々池遺跡などでは有舌尖頭器が確認されている。

縄文時代早期の押型文土器が確認される遺跡としては境川遺跡（8）がある。ここでは土器の他尖頭器、異形部分磨製石器などが採集されている。山田川流域の丘陵上にある狩口台遺跡（9）でも高山寺式の土器が出土している。標高30mの丘陵上に位置する大歳山遺跡は縄文時代前期土器編年の標式遺跡として有名である。前期末の土器が主体であるが、早期末、中期及び晩期の土器も確認されている。現海岸線から約300mの沖積地にある垂水日向遺跡（10）では早～前期に相当する干潟や、洪水によって押し流された流木が中期～晩期の土器とともに確認されており、縄文時代の自然環境を復元できる資料を提供している。舞子浜遺跡（11）では埴輪棺の調査中に、海浜砂層中に後～晩期の土器が確認されている。

明石川支流の伊川流域にある長坂遺跡（12）では縄文時代の遺構が調査されている他、南別府遺跡（13）で後期の土器が確認されている。

旧石器、縄文時代の遺跡は、遺構を伴う例が少なく全体の様相は不明な点が多いが、縄文時代早期の遺跡が丘陵上の標高の高い立地を示すのに対し後期以降、自然環境の変化に伴って沖積地に遺跡が分布している様子が窺える。

弥生時代

近畿地方最古段階の土器が確認されていることで古くから知られる吉田遺跡（14）や片山遺跡（15）は、明石川流域に広がる沖積地の背後にある段丘上に位置する。この沖積地は生産基盤となる稲作農耕の恰好の地であったことから、流域には玉津田中遺跡や新方遺跡（16）という拠点集落が前期より成立し、以後周辺地域に多くの集落の形成を促す。これらの集落は河川流域ごとにいくつかの遺跡群としてとらえられているので、ここでは遺跡群ごとに主要遺跡を概観することにしたい(註1)。

明石川と櫨谷川の合流点付近の遺跡

明石川中流域の沖積地にある玉津田中遺跡では、大規模な発掘調査により居住地・水田・墓地などの集落の全容が明らかにされている。また多くの土器や石器をはじめ、豊富な木製品や小形仿製内行花文鏡が出土しており、遺物の出土量でも他の遺跡を圧倒する大集落である。しかし、遺跡が河川流域に立地していることから幾度も洪水による土砂に見舞われ、中期後半には一時的に集落は衰退するが、後期中葉以降再び大きな集落が形成され古墳時代後期まで継続される。この周辺では小山遺跡（17）や居住遺跡（18）で前期の遺物が確認されているが、中期以降多くの集落が成立する。居住・小山遺跡（19）では中期中頃の竪穴住居が検出され、大型品を含む石包丁などが出土している。小山遺跡では後期を中心に古墳時代初頭にかけて多くの竪穴住居が確認されており、多量の土器が出土した溝からは銅鏃の出土も報告されている。菅野遺跡（20）では中期～後期の竪穴住居が、栃木遺跡（21）でも中期後半を中心とする集落が確認されている。日輪寺遺跡（22）では弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての竪穴住居が多数検出され、その前面に広がる沖積地では水田用水のためのしがらみを伴う河道が確認された二ツ屋遺跡（23）がある。

明石川と伊川の合流部付近の遺跡

明石川下流には近畿地方最古段階の土器が確認される吉田遺跡や片山遺跡がある。新方遺跡では石鏃を射込まれた近畿地方最古の前期人骨が良好な状態で確認され、弥生時代開始期の社会を考える上で、また人骨の形質学的観点からも注目を集めている。新方遺跡は中期に最盛期を向かえ、玉造り製作跡を含む多くの竪穴住居や大規模な方形周溝墓などが確認されており、古墳時代にかけて存続している。前期後半頃から生活の痕跡が確認されている今津遺跡（24）や出合遺跡（25）では、中期になると今津遺跡で竪穴住居や土器棺墓などの墓址が、出合遺跡では周溝墓が検出されており、周辺遺跡での集落の拡大化が見られる。後期には高津橋岡遺跡（26）で円形の竪穴住居が、今池尻遺跡（27）では後期の前半と中頃で建て替えが確認される竪穴住居などが検出されている。後期に新たに出現する吉田南遺跡（28）は古墳時代後期頃まで大きな集落として存続する。

明石川支流伊川流域の遺跡

明石川の支流伊川下流域には、明石川下流に成立した新方遺跡の拡大化にともなって出現する南別府遺跡があり弥生時代を通じて伊川流域の中核的な集落として存続している。伊川流域でも中期以降に多くの遺跡が確認されており、伊川を挟んで対峙する位置にある池上北遺跡（29）や池上口ノ池遺跡（30）では、中期～終末期にかけての住居や墓地などが検出されている。上脇遺跡（31）では後期の竪穴住居が検出された他、前期の土器も確認されている。標高100m以上の丘陵上に位置する頭高山遺跡（32）や表山遺跡（33）、櫨谷川流域にある青谷遺跡や城ケ谷遺跡（34）などは、中期末～後期初頭に成立する高地性集落

である。なかでも周辺の高地性集落の消滅を待つように出現する表山遺跡は環濠を伴い、西方の土器を多量に有する集落として周辺遺跡とは異質な様相をしめす遺跡として注目されいる。

山田川流域の遺跡

山田川流域では大歳山遺跡で前期中葉～後期にかけての集落が確認されている。中期以降流域の東西の丘陵上には舞子東石ケ谷遺跡（35）や狩口台遺跡などの高地性集落が後期にかけて営まれる。高地性集落が後期まで継続する点で明石川流域の集落との性格の違いが指摘されている(註2)。またこれらの丘陵に取り囲まれるように投ケ上（36）からは扁平紐式六区袈裟襷紋銅鐸が出土している。舞子丘陵から派生する標高30m前後の尾根上には、弥生時代中期～後期の竪穴住居が検出された清水ケ丘遺跡（37）がある。摂播国境付近にそびえる鉢伏山山頂にある鉢伏山遺跡（38）は高地性集落の一つとして知られている。なお、垂水沿岸部で確認される弥生時代の遺跡は垂水日向遺跡で前期～中期の土器がわずかに確認されるのみで、大きな集落の形成は認められない。

古墳時代（古墳）

当該地で確認される最古の古墳は明石川流域の天王山古墳群（39）の第4号墳、次いで5号墳である。いずれも前期前半の方墳で、5mを超える割竹形木棺等複数の埋葬施設を持つ。続いて前期後葉には明石川流域最古の前方後円墳である白水瓢塚古墳（40）が標高60mの薬師山山頂に築造される。大正末～昭和初年の直良信夫氏による踏査の記録によると、墳丘には3列の埴輪列が巡り、古墳周囲には埴輪円筒棺が100基近く存在することなどが報告されている。また発掘調査により墳丘規模56mの柄鏡形の前方後円墳であることや古墳周辺の埴輪棺や木棺墓の存在が明らかになっている。埋葬施設は盗掘を受けているものの割竹形木棺を納めた粘土槨で、前方部墳頂にも割竹形木棺を埋納する埋葬施設が確認されている。

五色塚古墳築造以前、垂水沿岸部での前期古墳の造営は認められず、明石川流域に天王山第4号墳、5号墳、それに続く白水瓢塚古墳の造営が確認されるのみである。この状況は大型前期古墳の点在する六甲山南麓の西摂地方とは対照的な様相を示している。

しかし前期末～中期初頭、その間隙を埋める五色塚古墳の築造を契機に周辺古墳の造営が開始される。

五色塚古墳西方500mの地にある歌敷山東古墳（41）、歌敷山西古墳（42）はいずれも円墳で、埋葬施設は粘土槨である。丘陵地形を利用して墳丘を築き、墳頂には鰭付円筒埴輪や蓋形埴輪等の存在が報告されている。また、歌敷山両古墳の西方には円筒埴輪片などが確認された墳丘状の高まりが舞子ケ平古墳（43）の名称で報告されている。

五色塚古墳西方800m付近の海岸沿いの砂浜には、多くの埴輪棺の埋葬で知られる舞子浜遺跡がある。鰭付円筒埴輪や朝顔形埴輪、楯形埴輪、蓋形埴輪など数種の埴輪を組み合わせて棺を構成しており、棺内からはまれに鉄製刀子や水晶製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉などの副葬品の出土するものも報告されている。また、棺に使用される埴輪には五色塚古墳の埴輪と共通した特徴を持つものがあることが、以前から指摘されている。

以上のように周囲には海岸に面した段丘の先端に小壺古墳をはじめ歌敷山両古墳、舞子ケ平古墳、文献に記載のある遊女塚、小塚、四ツ塚、七ツ塚などの古墳が築造され、埴輪棺による墓域を形成する舞子浜遺跡を含めて、五色塚古墳を中心に一つの古墳群を形成し

ていたと考えられる。しかし、現在確認できるのは小壺古墳及び舞子浜遺跡のみで、他の古墳は宅地造成で破壊されるなどいずれも消滅しており目にすることはできない。

また大歳山遺跡では、石釧や鏡、勾玉などの玉類が出土した粘土槨が確認されている。墳形などは不明だが、出土した石釧などから五色塚古墳とほぼ同時期の年代が与えられている。

五色塚古墳築造後、中期古墳の造営が確認されるのは明石川右岸の段丘上にある王塚古墳（44）である。欽明天皇の皇女舎人姫王の墓に比定され、玉津陵墓参考地として宮内庁の管理下にあるため詳細については不明であったが、平成12年の発掘調査で全長74m、3段築成の古墳であることが確かめられている。また出土埴輪より五色塚古墳の直後段階の時期が与えられている。

中期には当該地での活発な古墳の造営は認められないが、後期になると明石川流域、山田川流域各地で群集墳が盛行する。

明石川流域では後期前半頃にかけて木棺直葬の埋葬形態をもつ古墳群が各地で形成される。標高70m前後の丘陵上には天王山古墳群、池ノ内群集墳（45）、柿谷古墳群（46）、鬼神山古墳（47）、松陰新田古墳群などが分布している。天王山古墳群では前期古墳である第4号墳と5号墳の後、6世紀前半（48）の帆立貝式古墳である第3号墳が築かれ6世紀後半まで古墳群を形成している。直径14mの円墳である鬼神山古墳からは2基の礫床が確認され、鉄製馬具や武具、玉類をはじめ、変形五獣鏡などが出土している。

標高30m前後の段丘上に出合遺跡、水谷遺跡（49）、居住・小山遺跡や片山遺跡などで古墳が確認されている。いずれも墳丘は後世に削平を受けており、周溝のみが確認されている。出合遺跡では帆立貝式古墳である亀塚古墳を、水谷遺跡では同じく帆立貝式古墳の水谷大東古墳を各々盟主墳に方墳や円墳で構成される古墳群を形成している。居住・小山遺跡は木棺直葬と横穴式石室を埋葬施設にもつ慶明寺古墳群の一支群と捉えられている。

広範な範囲で発掘調査が行われた結果、古墳群を含めた集落内の様相が明らかになった高津橋大塚遺跡（51）や延命寺古墳（50）周辺では、滑石製の玉類や変形四獣鏡が出土した割竹形木棺を納める高津橋大塚古墳を中心に5基の古墳の造営が確認されている。また、割竹形木棺を埋葬施設にもつ松本4号墳（52）の周辺には小型の埴輪棺が確認されている。明石川下流域にはあさぎり寮古墳などの木棺直葬と推定される後期古墳がある。

明石川流域では後期前半頃までは木棺直葬の群集墳の盛行をみるが、後期後半、明石川上流や後述する山田川流域で横穴式石室を持つ群集墳が形成される。

山田川東岸の舞子丘陵にある舞子古墳群には6世紀中頃～7世紀初頭頃の横穴式石室を主体部にもつ古墳が数多く点在している。古墳の多くは宅地開発などで破壊されていて現在は十数基ほどが確認されるのみだが、その総数は60基近くに及ぶものとされている。墳形は径10～15mの円墳が主体で、尾根筋や丘陵の平坦面にいくつかの支群に分かれて分布している。副葬品は須恵器や土師器、武具や馬具などの鉄製品、金環やガラス玉などの装身具などがこれまでの調査で確認されている。中でもＴ字形横穴式石室を埋葬施設に持つ6世紀中葉の毘沙門1号墳からは銀製空玉や鉄地金銅張胡籙金具などが出土しており、有力者の墓であると考えられている。

古墳群の最西部にある大歳山支群には、全長35mの前方後円墳である大歳山2号墳が確認されている。大歳山2号墳は横穴式石室を埋葬施設にもち、台付装飾壺などの須恵器が

確認されている。

山田川西岸には団地造成で消失した多聞群集墳があり、推定80～100基の古墳が7支群に分かれて点在していた。舞子古墳群同様6～7世紀にかけての後期古墳で横穴式石室を主体とし径10～15m前後の規模の円墳が多く確認されているが、古墳群のなかには石室内に石棺をおさめるものや径25mを超える大きな円墳が築かれていることから、多聞群集墳の被葬者集団を舞子古墳群の集団より優位な立場と考えるむきがある。ただ盗掘が著しく副葬品の状況などは不明な点が多い。また古墳群の中には埋葬施設全てが木棺直葬である西脇支群や横穴式石室と木棺直葬の両者が見られる深谷支群など埋葬施設の多様性がみられる。特に西脇支群については時期的に古い様相を示しており、北方にある本多聞群集墳(55)あるいは明石川流域の古墳群との関連が指摘されている。山田川西岸の最下流には二重の周濠をもつ6世紀後葉のきつね塚古墳(56)がある。両袖式の横穴式石室内には組合式家形石棺をおさめ、金銅装馬具などの副葬品を備える単独墳として、古墳群のなかでも特色のある古墳として神戸市指定史跡に指定されている。

福田川流域の標高170m付近の丘陵上には6世紀後半に築造される高塚山古墳群(57)がある。古墳群は15基からなり、埋葬施設はすべて横穴式石室である。なかにはT字形の石室で複室構造をとるものや、石室の壁面に馬などの線刻を施したもの、火葬の痕跡が残されるものなどがあり、多様な埋葬の状況が明らかになっている。

古墳時代(集落)

明石川流域の弥生時代を通して中核的な集落として存続した玉津田中遺跡や新方遺跡は古墳時代になるとその規模が縮小し、代わって吉田南遺跡で大規模な集落が形成される。

吉田南遺跡では古墳時代全時期を通して多くの竪穴住居が検出され、豊富な遺物の出土が報告されている。一方、玉津田中遺跡ではその規模は縮小するものの、前期～中期にかけての竪穴住居や水田等の継続が認められ、同じく新方遺跡では中期～後期の竪穴住居から玉造り関連の遺物が出土するなど、規模は縮小するものの周辺集落とは異なる様相を示している。

明石川流域のその他の前期集落は弥生時代後期から継続する集落として確認される遺跡が多い。明石川と櫨谷川の合流付近にある日輪寺遺跡では弥生時代後期から継続して古墳時代前期の集落が営まれ、その周辺には前期前半のしがらみを伴う河道が検出された二ツ屋遺跡や水田跡の確認された丸塚遺跡(58)があり、生産域を含めた集落の景観が復元できる。他に、栃木遺跡や菅野遺跡、小山遺跡などで弥生時代後期より継続して古墳時代前期の集落が確認されているが、中期へと継続する集落は少ない。

中期に大きな集落として発展する出合遺跡では、中期～後期にかけての竪穴住居が多数検出され、また韓式系土器の出土も報告されている。弥生時代後期より継続する上脇遺跡では、古墳時代中期に竪穴住居や掘立柱建物などが多く確認され、後期に引き続いて集落が営まれている。古墳時代全時期を通じて集落の営みが確認されることから、周辺にある後期古墳群との密接な関わりが指摘されている。他に菅野遺跡や池上口ノ池遺跡、長坂遺跡などで中期の集落が確認できる。

後期にも多くの集落が確認されているが、中でも白水遺跡(59)、高津橋大塚遺跡周辺では、竪穴住居及び掘立柱建物や滑石製品を伴う祭祀遺構、水田域が調査されており、その背後にある古墳群を含めた集落の様相が明らかになっている。また伊川と明石川の合流部東

側に新たに成立する寒鳳遺跡（60）では、５世紀末～６世紀初頭にかけての竪穴住居、掘立柱建物、６世紀中頃の大壁造り建物が多数確認され、特異な集落の様相を示す遺跡として捉えられている。また上ノ丸貝塚（61）からは小規模ではあるが後期の貝層が確認されている。

一方福田川流域では、垂水日向遺跡で弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の竪穴住居や前期末～中期初頭の土師器の高杯や小型丸底壺、ミニチュア土器が出土する大溝が検出さ

番号	遺跡名	参考文献番号	番号	遺跡名	参考文献番号
1	舞子古墳群	1・2・3・4・5・6・7・8	36	投ケ上銅鐸出土地	18・54・55・56
2	大歳山遺跡	9・10・11・12・13	37	清水ケ丘遺跡	26
3	野々池遺跡	14・15・16	38	鉢伏山遺跡	18
4	名谷遺跡	17・18	39	天王山古墳群	7・18・40・57
5	青谷遺跡	18・19	40	白水瓢塚古墳	24・25・30・40・58・59
6	高津橋大塚遺跡	20	41	歌敷山東古墳	18・60・61
7	玉津田中遺跡	3・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33	42	歌敷山西古墳	18・60
8	境川遺跡	15・34	43	舞子ケ平古墳	62
9	狩口台遺跡	35・36	44	王塚古墳	18・48・63
10	垂水・日向遺跡	23・24・25・26・27・28・29・37	45	池ノ内群集墳	52
11	舞子浜遺跡	25・26・38・39・51	46	柿谷古墳群	3・18
12	長坂遺跡	5・6・29・40・41	47	鬼神山古墳	18・64
13	南別府遺跡	18	48	松陰新田古墳群	16
14	吉田遺跡	18・42・43	49	水谷遺跡	23・27・28・30
15	片山遺跡	18・43	50	延命寺古墳	65
16	新方遺跡	1・2・4・5・6・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・40・44	51	高津橋大塚古墳	20
17	小山遺跡	25・26・27・31	52	松本４号墳	1
18	居住遺跡	2・3・45・46	53	あさぎり寮古墳	16
19	居住・小山遺跡	2・3・45・46	54	多聞群集墳	66
20	菅野遺跡	27・28	55	本多聞群集墳	18
21	栃木遺跡	6・7・21・23・26・27・28・29・30・40	56	きつね塚古墳	7・24
22	日輪寺遺跡	27・47	57	高塚山古墳群	67
23	二ツ屋遺跡	24・25・27・28・29	58	丸塚遺跡	68
24	今津遺跡	3・4・24・29・30・31	59	白水遺跡	20・69
25	出合遺跡	7・18・21・23・25・27・28・29・30・40・46・48	60	寒鳳遺跡	27・28・30・31
26	高津橋岡遺跡	1・23・25・28	61	上ノ丸貝塚	16
27	今池尻遺跡	24	62	太寺廃寺	16・70
28	吉田南遺跡	1・18・31・43・46・48	63	北別府遺跡	1・2
29	池上北遺跡	2・3・28・45	64	上池遺跡	7・40・46
30	池上口ノ池遺跡	40	65	赤羽遺跡	31
31	上脇遺跡	49・50	66	林崎三本松瓦窯跡	71・72
32	頭高山遺跡	2・3・27・28・29・40・45	67	前開遺跡	5・6
33	表山遺跡	52	68	乙木遺跡	73
34	城ケ谷遺跡	27・28・29	69	野田遺跡	74
35	舞子東石ケ谷遺跡	53	※番号は地図の番号と対応する		

表１－１　遺跡名および五色塚古墳周辺の歴史的環境参考文献番号

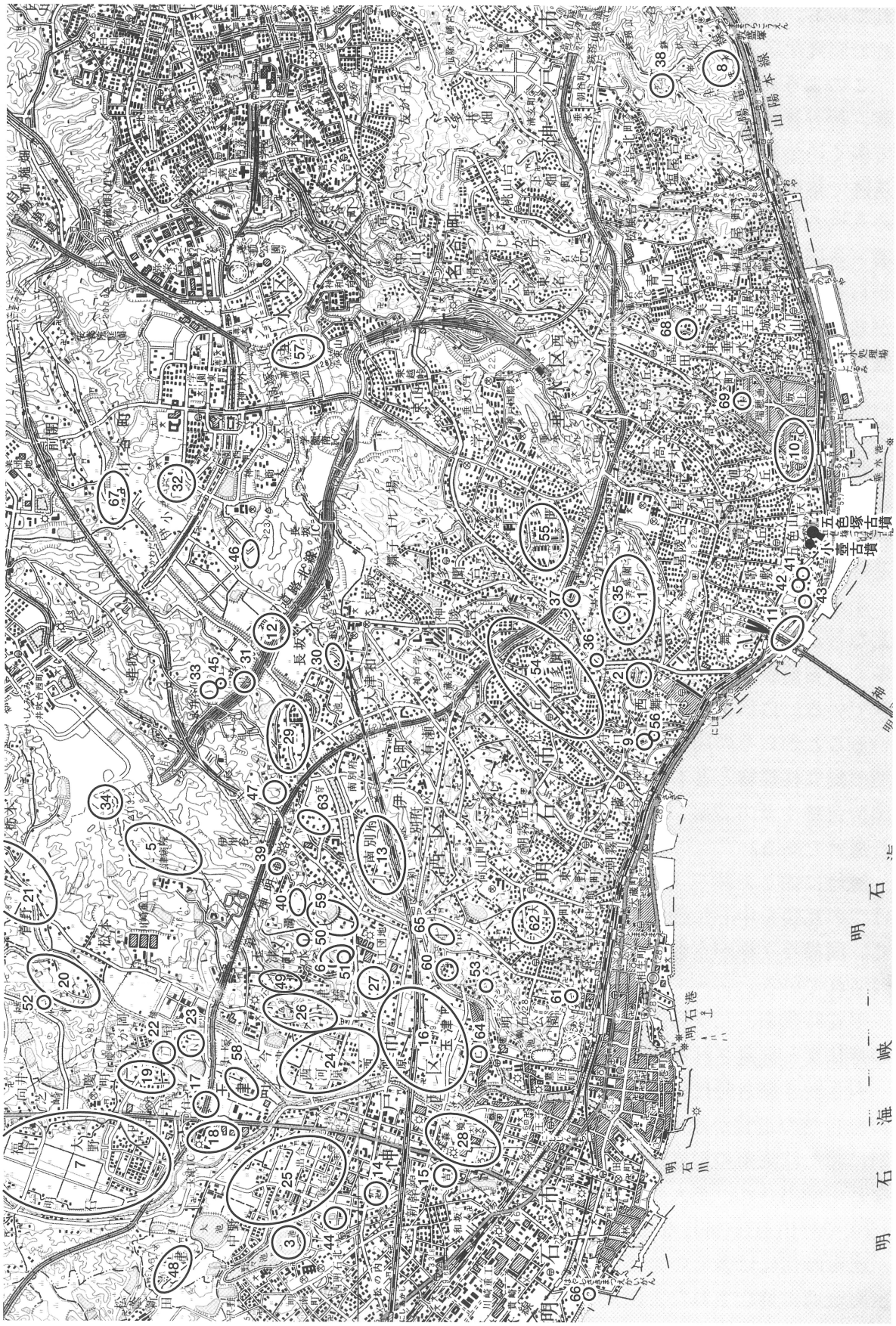
五色塚古墳
明石海峡
明石川
明石港
山陽本線
長坂
大蔵谷
伊川谷町
明石市
西区
垂水区
名谷町
舞子ゴルフ場
舞子
西舞子
明石駅
大久保駅
西明石駅
垂水駅
舞子駅
名谷駅
伊川谷駅
神戸電鉄
JR
小壺古墳

図1－4　周辺遺跡分布図

れている。以後中期の集落は現在のところ不明確だが、後期には山田川流域の清水ケ丘遺跡で竪穴住居が検出されている。

このように明石川流域には古墳時代全時期を通じて継続する吉田南遺跡や玉津田中遺跡、新方遺跡を中心に多くの集落が形成されている。特に後期には群集墳の盛行に見合って多くの集落が出現する。これに対し山田川・福田川流域では、垂水日向遺跡や清水ケ丘遺跡で集落が形成されるものの、経済基盤となる可耕地の問題もあり、大集落の形成は認められない状況である。こうした点から山田川流域に見られる後期の群集墳（舞子群集墳・多聞群集墳）については明石川流域の集団との関わりが指摘されており、同様な観点から五色塚古墳の被葬者についてもその背景に明石川流域に形成された諸集落との関わりが考えられている(註3)。

歴史時代

古墳時代から継続する吉田南遺跡では引き続き大規模な集落が維持されている。奈良～平安時代には規格性のある掘立柱建物群が検出され、あわせて木簡や墨書土器、陶硯、帯金具など官衙的性格の強い遺物が出土していることから、明石郡衙に比定されている。白鳳時代に創建された明石郡唯一の寺院である太寺廃寺（62）では近年の発掘調査で、創建時の掘立柱建物や竪穴住居が検出され、多くの瓦が出土している。奈良時代の集落は新方遺跡、北別府遺跡（63）や高津橋岡遺跡、菅野遺跡などでも確認されている。

上池遺跡（64）では平安時代前半の遺物が多量に出土しており、中には硯や墨書土器、瓦などが含まれることから一般集落とは異なる様相を示している。平安時代後期になると多くの集落が形成されるが、そのなかには一般集落とは異なった様相を示す遺跡も確認されている。白水遺跡では平安時代の梵鐘鋳造遺構が確認され、また多くの瓦類が出土していることからその周辺に古代～中世の寺院の存在が推定されている。寒鳳遺跡では平安後期の掘立柱建物とともに、陶硯や石帯、青磁容器蓋や瓦などが出土している。付近には吉田南遺跡や新方遺跡、赤羽遺跡（65）などがあり旧山陽道との関連という点でも注目される遺跡である。

海岸に面した段丘上に位置する林崎三本松瓦窯跡（66）では、平安時代～鎌倉時代にかけての瓦類を中心に焼成した窯跡が検出されている。なかでも軒丸瓦・軒平瓦の割合が高く、同様な文様が京都の六勝寺跡、鳥羽離宮跡、平安京内裏跡などから出土しており、注目されている。

平安時代末、二ツ屋遺跡では整然と配置された掘立柱建物群の内側に池を配し、瓦葺きの持仏堂と推定される礎石建物が検出されており、地方貴族の邸宅と考えられている。

引き続き鎌倉時代にもより多くの集落が形成される。玉津・田中遺跡では周囲を堀で囲んだ居館の造営が認められ、大量の遺物が出土している。また前開遺跡（67）ではこの時期に新たに集落の形成が認められる。垂水・日向遺跡では平安末～鎌倉時代の掘立柱建物などが検出され、東大寺領「垂水荘」との関連が指摘されている。また付近には乙木遺跡（68）や野田遺跡（69）などの中世集落が確認されている。

室町時代には多くの集落の他、中世寺院関連の遺跡が確認されている。日輪寺遺跡では室町後期に焼亡されたと伝えのある日輪寺の寺域区画に想定される築地状遺構が確認されている。宅地造成に伴う大規模な発掘調査により中世山岳寺院のほぼ全容が明らかになった頭高山遺跡は、地域の伝承などから天台宗「大谷寺」跡であると推定されている。

註1：丸山　潔　1992「弥生集落の動態（1）－摂播国境地域－」『究班』

註2：参考文献 53

註3：山本三郎　1998「王権と海上交通・序説－大阪湾と播磨灘に面する古墳を中心に－」『渡辺誠先生還暦記念論集　列島の考古学』

〈五色塚古墳周辺の歴史的環境　参考文献〉

1．神戸市立考古館　1980『地下に眠る神戸の歴史展』

2．神戸市教育委員会　1983『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』

3．神戸市教育委員会・神戸市健康教育公社　1984『地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ』

4．神戸市教育委員会　1985『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』

5．神戸市教育委員会　1987『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』

6．神戸市教育委員会　1988『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』

7．神戸市教育委員会　1989『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』

8．神戸大学考古学研究会　1988『舞子古墳群の分布および測量調査報告』

9．神戸女子商業高等学校歴史クラブ　1963『大歳山　第1次発掘調査概報』

10. 大谷大学考古学研究会　1969『'69大歳山　決着に時効は無い　自主報告書』

11. 春成秀爾　1981「神戸市大歳山の古墳ほか」『兵庫考古』第15号

12. 中村善則　1986「播磨大歳山遺跡1－縄文土器－」『神戸市立博物館研究紀要』3

13. 直良信夫　1987『大歳山遺跡の研究』

14. 松本正信・安川豊史・春成秀爾　1982「播磨南部採集の旧石器」『旧石器考古学』24

15. 真野　修　1986「明石地域の縄文時代」『神戸古代史』Vol. 3』1（№ 7）

16. 明石市教育委員会　1988『明石市史資料（考古篇）』第4集

17. 菅理　1974「神戸市垂水区名谷町中山附近出土の有舌尖頭器」『神戸古代史』Vol. 1』5

18. 新修神戸市史編集委員会　1989『新修神戸市史』歴史編Ⅰ

19. 赤松啓介　1973「神戸市垂水区青谷遺跡出土石弋（一）」『考古学雑誌』59－3

20. 神戸市教育委員会　2000『白水遺跡第3・6・7次　高津橋大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書』

21. 神戸市教育委員会　1992『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』

22. 神戸市教育委員会　1993『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』

23. 神戸市教育委員会　1994『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』

24・神戸市教育委員会　1995『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』

25. 神戸市教育委員会　1996『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』

26. 神戸市教育委員会　1997『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』

27. 神戸市教育委員会　1998『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』

28・神戸市教育委員会　1999『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』

29. 神戸市教育委員会　2000『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』

30. 神戸市教育委員会　2001『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』

31. 神戸市教育委員会　2002『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』

32. 兵庫県教育委員会　1996『玉津田中遺跡－第6分冊－（総括編）』

33. 神戸市教育委員会　2000『玉津田中遺跡発掘調査報告書』

34. 片岡　肇　1974「近畿地方における押型文土器文化について」『平安博物館研究紀要』5

35. 神戸市教育委員会　1990『狩口台遺跡発掘調査報告書』

36. 狩口台遺跡発掘調査団　1991『狩口台遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
37. 神戸市教育委員会・（財）神戸市スポーツ教育公社　1992『神戸市垂水・日向遺跡　第1・3・4次調査』
38. 神戸新聞社会部編　1960『祖先のあしあと』Ⅳ
39. 兵庫県教育委員会　2000『ひょうごの遺跡』36号
40. 神戸市教育委員会　1990『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』
41. 兵庫県教育委員会　2001『神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 長坂遺跡』
42. 直良信夫・小林行雄　1932「播磨国吉田史前遺蹟研究」『考古学』3－5
43. 田辺昭三　1978「埋蔵文化財発掘調査の記録」『吉田、森友のあゆみ』神戸市玉津土地区画整理組合
44.「文部省科学研究費（地域連携推進研究）古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会　2000『シンポジウム 新方遺跡からの新視点 瀬戸内弥生文化のパイオニア シンポジウム講演資料集』
45. 神戸市教育委員会　1986『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』
46. 神戸市教育委員会　1994『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』
47. 神戸市教育委員会　2002『日輪寺遺跡発掘調査報告書』
48. 兵庫県史編集専門委員会　1992『兵庫県史』考古資料編
49. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1996『平成７年度　年報』
50. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1997『平成８年度　年報』
51. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2000『平成11年度　年報』
52. 兵庫県教育委員会　2000『神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 表山遺跡 池ノ内群集墳』
53. 神戸市教育委員会　1990『舞子・東石ケ谷遺跡Ⅱ』
54. 島田貞彦　1929「播磨国明石郡垂水村発見銅鐸」『考古学雑誌』19－2
55. 直良信夫・直良勇二 1929「垂水村新発見の銅鐸とその出土状況」『考古学雑誌』19－2
56. 直良信夫　1929「石器其他を出土せる日本上代の遺蹟」『考古学雑誌』19－8
57. 神戸市教育委員会　1972『天王山古墳群発掘調査概要』
58. 直良信夫　1943「白水夫婦塚とその近周の合口棺」『近畿古代文化叢考』
59. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2002『平成14年度兵庫県埋蔵文化財調査成果連絡会資料』
60. 梅原末治　1931「垂水歌敷山古墳の調査」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第８輯
61. 京都大学文学部　1968『京都大学文学部博物館考古学資料目録』
62. 赤松啓介　1967「兵庫県神戸市舞子ケ平古墳」『日本考古学年報』15
63. 徳田誠志他　2002「玉津陵墓参考地墳丘裾・外堤内法裾護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』53
64. 神戸市教育委員会　1967『鬼神山古墳』
65. 多渕敏樹・喜谷美宣　1976「延命寺古墳」『日本考古学年報』27
66. 兵庫県立飾磨高等学校郷土史部　1967「多聞群集墳発掘調査略報」『かれすすき』3
67. 神戸市教育委員会　1994『高塚山古墳群発掘調査概要』
68. 兵庫県教育委員会　2000『丸塚遺跡発掘調査報告書』
69. 神戸市教育委員会　1999『白水遺跡第4次』
70. 明石市文化博物館　2003『太寺廃寺現地説明会資料』
71. 明石市教育委員会　1999『明石市文化財年報　平成９年度』
72. 明石市教育委員会　2000『明石市文化財年報　平成10年度』
73. 乙木遺跡発掘調査団　1991『乙木遺跡』
74. 高山歴史学研究所　1991『野田遺跡』

第２章　　古文献に見る五色塚古墳

五色塚古墳は、海岸沿いに築かれ、しかも大型の古墳であることから、古くから注目され、それについての記述が多く見られる。古くは、「千壺」と呼ばれることも多かったようである。このように大きな古墳であれば、当然風土記に何らかの記載があったのであろうが、残念ながら「播磨國風土記」の明石郡は、今欠落している。

ここでは、古文献に記された五色塚古墳について考えようとしていることから、当然資料的に古く、一般的に手に入れ難いものも多いことから、冗長になるができる限り引用しておきたい。また、引用については、原文にしたがい、旧字・誤字・脱字などもそのままにしておくことにする。

１．江戸時代およびそれ以前の文献

古くから、五色塚古墳に関する最古の記事と言われているものは、「日本書紀」神功皇后摂政元年二月の記事である。

> 爰伐新羅之明年春二月、皇后領群卿及百寮、移子穴門豊浦宮。即収天皇之喪、從海路以向京。時麝坂王・忍熊王、聞天皇崩、亦皇后西征、并皇子新生、而密謀之日、今皇后有子。群臣皆從焉。必共議之立幼主。吾等何以兄從弟乎。乃詳爲天皇作陵、詣播磨興山陵於赤石。仍編船絙于淡路嶋、運其嶋石而造之。則毎人令取兵、而待皇后。
>
> さて新羅をお伐ちになった翌年の春二月に、皇后は、群卿および百寮をお率いになって、穴門豊浦宮にお移りになった。そうして天皇のお遺骸をとりおさめて、海路より京に向かわれた。そのとき、麝坂王と忍熊王とは、天皇がお崩れになり、また皇后が西方をお討ちになり、あわせて皇子をあらたにお生みになったと聞いて、ひそかに謀って、
> 「いま皇后には、御子がおられ、群臣はみな従っている。かならず協議して幼い主を立てるであろう。われらは、どうして兄として弟に従うことができよう」
> と言って、偽って天皇のために陵を作るふりをし、播磨にやってきて山陵を赤石に建てた。そうして船を編成し、淡路嶋に渡って、その島の石を運んで山陵を造った。そのとき、人ごとに武器を持たせて、皇后が来られるのを待った。
>
> （日本書紀　上　井上光貞監訳　中央公論社　1987年）

この記事の「赤石に築造された陵」が五色塚古墳に比定されたのは、播磨国明石郡内で、皇后の凱旋を待つ海岸沿いにあり、陵といえる程度の規模をほこる古墳は、五色塚古墳をおいて他に見あたらないためであろう。日本書紀によると、この陵は「偽陵」で、誰も葬られていないことになる。しかし、明治以来多くの人類学者・考古学者が説くように、そ

こに誰が葬られているかは別にして、古墳時代に生きた人物の墓であることは間違いない。

現在確認できるもので、「五色塚」「千壺」の名が記されている最も古い文献は、明暦３(1657) 年に描かれた「摂津名所地図」である。「垂水村」と「山田村」(現在の垂水区舞子付近) の間に、小丘とその上に松が描かれ、その下に「五色塚」と記されている。

兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯の「五色塚 (千壺) 古墳」に、「諸陵周垣成就記」からの引用として

壺の形を書き都合三匝り程とあり。
仲哀天皇陵土俗五色塚千壺と云ふ。
壺に五色の花を生じたる故也と云ふ。

とある。この書物は元禄11 (1698) 年、細井知慎によって著されたもので、「五色塚」「千壺」の名称が確認できる最も古い資料になるが、「勤王文庫」第参編所収の「諸陵周垣成就記」には、そのような記述はなく、上記の引用は不明である。

ついで古いものは、享保年間 (1716～1736年) に成立した明石藩領内の地誌「明石記」で、明石郡に関する部分は「金波斜陽」、美嚢郡に関する部分は「玉彩光分」という書名でも呼ばれている。五色塚古墳に関する部分を、長くなるが引用しておく。

廟稜　境内百十八間ニ七十四
　　間　俗号五色塚ト
　　人皇十四代　仲哀天
　　皇之御廟也享保四年
　　迄凡千五百二十年ニ成
日本書紀曰
　足仲彦天皇　仲哀天皇
　足仲彦天皇日本武尊第二子也母皇后曰兩道入姫命活目入彦五十狹茅天皇之女也天皇容姿端正身長十尺稚足彦天皇四十八年立爲太子時年三十一稚足彦天皇無男故立爲嗣六十年天皇崩明年秋九月壬辰朔丁酉葬子倭国狹城盾列陵盾列此云多々那美
　按ニ當村此陵ハ應神天皇之異母大中津姫命之生ル御子麝坂王忍熊兩王子之所造也爰ニ非葬ル實ハ河内國葬ル長野ニ
　今此陵ヲ見ルニ山如鉢伏ノ黒色ニ丸形ノ石積疊ナリ至梺如小壺物ヲ如車輪埋ナリ壺ノ徑可一尺周廻ニ松生ス
　俗傳云此壺ヲ号花瓶ニ此廟築時此瓶ニ五色花ヲ生ケ御葬儀ノ式有シ由云傳近代作之休天神ト号スル謡ニモ此陵ノ事ヲ作入テ号花瓶最無覺束事也
　按此花瓶ト云埴輪ハ云者也陵ヲ造時土中ニ埋ム物也年歴ヲ經テ自顕也　前王廟陵記神功皇后之山陵之所ニ松下見林加今按日盾列池上ノ陵俗ニ御陵山在超昇寺村西山陵麓有鳥居半腹敷如小壺物周廻如車輪此謂埴輪之類立陵上者頂石棺露年代久土崩自露乎若戰國賊發之乎云々今當國仲哀天皇之陵モ此類也又大和名処記ニ神功皇后陵今此陵を見るに年ふりければにや石棺土を出はにハ草むらのかげに殘りたりと有云々
　按此壺則埴輪ノ畧乎

上記部分は、寶暦12 (1762) 年、平野庸修によって編纂された「播磨鑑」に引用されてい

るのがよく知られているが、今回「明石記」の所有者のご厚意で複写をさせていただき引用した。しかし、「播磨鑑」の引用とは異なる部分もある。大きな部分は、「播磨鑑」には『在垂水村東山上』とあり、また『此陵延喜式不載實非山陵故也 壺数 南北百三十 東西三十』とある点である。

これによると、その大きさは百十八間の七十四間とあるから、およそ215m×135mで、「境内」としていることから、周濠を含んだ大きさと考えれば、ほぼ正確な数値である。こんもりとした鉢を伏せたような形で、表面には黒くて丸い石を積んでいるとあることから、二段目と三段目に葺かれている斑糲岩の葺石が、松が生い茂っていたとはいえ表面に露出し、観察できる状態であったことが知られる。また、直径一尺の壺（埴輪）が巡らされているとある。俗に、この壺は花瓶で、この墓を築いた時、この中に五色の花を生けて葬儀をしたとして、五色塚の名の由来を暗示している。

そして、大和の複数の陵の例を引き、埴輪のことや、頂上の土が崩れ、石棺が露出しているとある。石棺が現れるのは自然であったり、戦国の世に荒らされたからであろうとも解釈している。そして、それらの事柄が「今當國仲哀

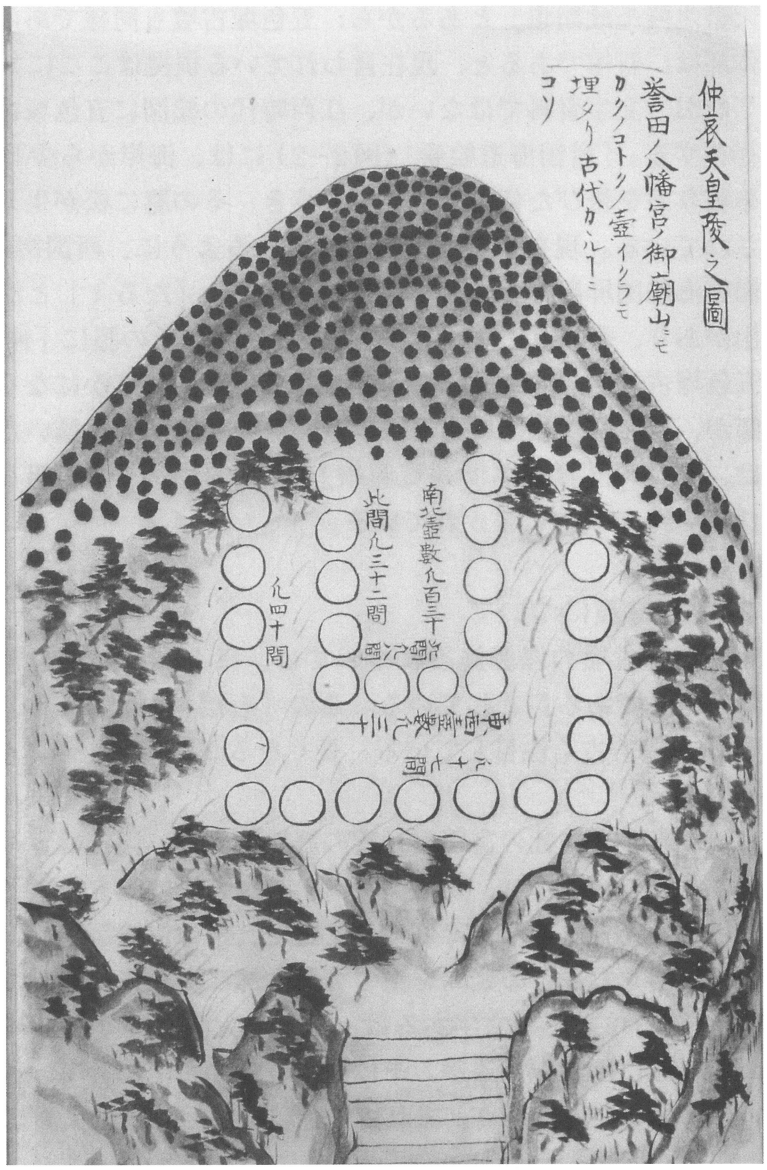

図2－1 「明石記」

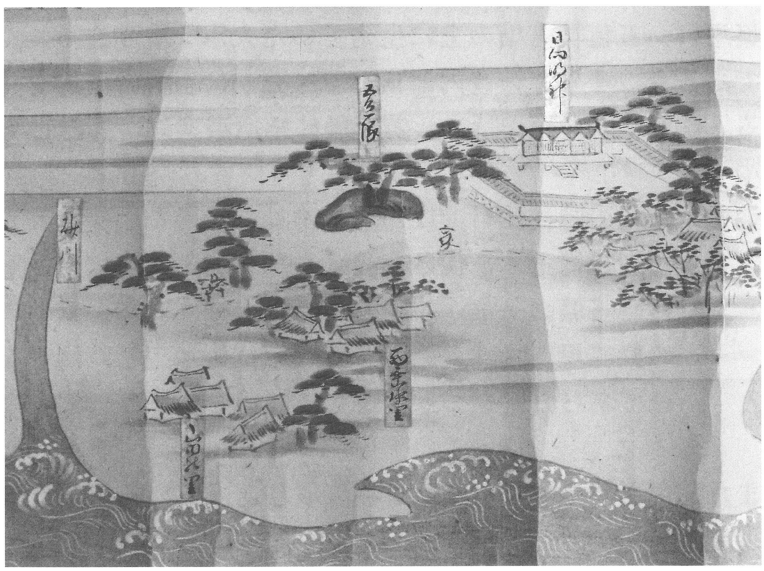

図2－2 「西国海道絵巻」部分

天皇之陵モ此類也」とあるから、五色塚古墳も同様であると言っている。五色塚古墳の主体部は、石棺であると、現在言われている根拠はここにある。

なお、文字資料ではないが、江戸時代の絵図に五色塚古墳が描かれているものが何点か存在する。「西国海道絵巻」（図２-２）には、海岸から少し入った部分に街道が描かれ、笠を被り刀を帯びた侍らしき人物が歩き、その脇に松が生えた小山が描かれ「五色塚」と記されている。現在の国道二号線に重なるように、西国街道が通っていたようである。「西海筋海路図屏風」（堺市立博物館所蔵）には「たるミ」と海岸沿いに記入され、その奥に小山があり、その上には寶篋印塔が描かれて、その脇に「仲哀天皇ノ石塚」と記されている。五色塚古墳の上に寶篋印塔が描かれている例はほかになく、おそらく現地を見ていない絵師が、参照した絵図にある隣の遊女塚の寶篋印塔を描いたのであろう。遊女塚の寶篋印塔は、後掲の「播州名所巡覧圖繪」（図２-８）や「播州明石郡舞子濱續垂水名所五色塚圖」（図２-９）に明瞭に描かれている。

2. 埋葬施設について

五色塚古墳の埋葬施設については、ほとんどの解説書は「播磨鑑」の記事を引用し、『「石棺」である』としている。この「石棺」の記事については、八木奘三郎（八木　1894年b）が最も古く注目している。長くなるが引用しておこう。

> 現今海神社の宮司上月氏の談に據れば、同社は寛永二年……、千壺に生ぜし一木を以て之を作り、（改築ならん）其枝を以て臼を作ると云へり、去れば其大木たりし事は充分之を知り得可く、又随て其木は古墳築造の當時目標に殖へしものにはあらあざりしやとの疑問を生ず可し。然に寛永二年を距たる十五年後、享保四年の記中に「石棺露」の文字あるは、墓標の大木を取り去られし爲め、遂に石棺を出すに至れるにはあらざる乎、予は同所後部の頂上に於て、確かに石槨の破片を實見し又其一個を持ち歸れり。去れば千壺には石棺あり、又石槨あるものと見て可なり、

「播磨鑑」に引用されている「石棺露」の記事が書かれた十五年前に、海神社の社殿改築用に、五色塚古墳の上に生えていた大木を取り去ったため、大穴が開き石棺が現れたのであろう。そして、後円部頂上で、確かに石槨の破片を見つけ、持って帰った、としている。これによく似た話を、27年後に福原潜次郎が採録している（福原　1921・1929年）。

> 寛文の時代に附近にある海神社の社殿を改築された時に、五色冢の後部頂上にあった大松樹一本を伐りて社殿全部の築造に充てた。……根株まで掘り採ったので、其當時石壙の一部が露はれてゐたのであらう。六七年前まで後部頂上に横一尺四五寸の縦二尺五六寸、厚さ二寸五分位の加工した絹雲母片岩のいと美しきものが放棄されてあったがいつとはなしに破壊され、今は其破片が所々に散亂してゐる。

また、福原は、よく似た話を再度取り上げている（福原　1932年）。

> それは今から百五、六十年前のことであるが此の千壺山は日向明神の社家が管理し

ていたが塚の上に三抱えもある大松樹があって、ある年大風のため根諸共に仆れた……　當時の實見者の話の傳へによれば啻山土の固めたるものの上に三尺に二尺厚さ八寸許りの平板石のありしを見たるのみ、此石は取り出して小祠を建てたる際其側に置きたりといふも殘り居たるが此の石は絹雲母片岩にて作れるものにていと柔らかにて美しきものなれば目につき安くために今は悉く持ち去られ跡方もなくなれり。

八木が聞き取り調査をした同一の宮司の言によるものか、その他の人によるものか、あるいは八木の記事を元に新しく知り得た内容を付加したものか不明であるが、時期が「寛永」(1634～1644) と「寛文」(1661～1673年) で一字違いで異なり、また「社殿の改築」用と「社殿全部の築造」用としている点で、その用途についても若干異なるが、石材については岩石名や寸法を記載する点で、八木より詳細である。

石材については、その大きさが先後で異なるが、「横一尺四五寸の縦二尺五六寸、厚さ二寸五分位」は、「横42.4～45.5cm、縦75.8～78.8cm、厚さ7.6cm」、「三尺に二尺厚さ八寸」は、「90.9cmに60.6cm、厚さ24.2cm」である。いずれも結晶片岩の板状の石材としており、その大きさから石槨の蓋石ないしは壁面構築材と考えられる。

仲彦三郎も「今も頂上に於て石槨の破片を實見し得、去れば千壺には石棺あり又石槨あるものと見て可なり」と記すが (仲　1911年a)、その内容から、八木説 (八木　1894年b) をそのまま採用しているにすぎない事がわかる。

結晶片岩は、発掘調査中に墳丘上や壕外からも数多く発見されている。おそらく石槨の一部が破壊され、その石材が散乱したものと考えられることから、竪穴式石槨が存在したのは確かであろう。しかし、「金波斜陽」に記載されている「石棺露」は、石槨を石棺と記したものか、石槨内に石棺が見えたものかは不明である。五色塚古墳の年代観からいって、竪穴式石槨内に石棺が存在してもよい時期であるから、どちらとも判断し難いが、江戸時代の一般的な人々の観察による伝聞であるから、単に石槨石材が墳頂部の攪乱坑内に露出していたと考えた方が自然ではないだろうか。ちなみに、墳頂部の発掘調査時には、石棺が露出していたと考えられるような、大きな撹乱は検出されていない。

3. 埴輪について

江戸時代以来、最もよく取り上げられているのは、埴輪と葺石についてである。埴輪は多くの場合「壺」と記載され、五色塚古墳の別称である「千壺」の名称の由来としている。その大きさについて触れているものも多く、直径は「一尺」「一尺五寸」「一尺から一尺八寸」などとなっていて、「一尺八寸」を除けばおよそ30cmから45cmで、実物の直径と合致している。「一尺八寸」を信じれば、およそ55cmであるから、周濠の外側に樹立されていたことが判明してきた、大型の円筒埴輪の直径にあたり、古くは大型品もまた、知られていたことになる。

埴輪の詳細については、太田陸郎が採集資料から

特異形状を作る第一條件たる鰭は第一帯 (最大帯) から始まって居り何處で終ってゐるかは不明であるが、圓筒の高さは約七八十糎にも及んでるものではあるまいか、

そして突帯は第三帯であって上部迄附着してゐる様に思はれる

と唯一触れている（太田　1931年）。この「特異形状」と記す鰭や突帯について、藤井忠が「形姿各一様ナラス鍔ノ有ルアリ亦異形ナル耳アルアリ」と表現したことから(藤井1879年)、混乱した研究者もいた。その最たる研究者は福原で、「此程完成したる埴輪こそ久しく疑問たりし、所謂鍔あり耳あるもの丶正體を明かにし、其器が甑たることを認むるに至ったのである」とし、その結果、「五色塚」の名称の由来は「甑冢　コシキツカ」によるものと断定した（福原　1921・1929年）。

埴輪について最も追求しているのは、八木である（八木　1894年a）。東京から現地に赴き、

發掘せし總數は實に鮮なきにあらず。而して尤も能く舊形を認めしは古墳の前面即ち海に臨みし塲處なりとす……　前面の埴輪は概ね長さ一尺に近く、且當時棒を差し込みたる孔部を存するものも多く、また發掘も容易なりし爲め、先づ其各所を探求せり

と自ら記述しているように、前方部南面を中心に相当数の埴輪を発掘したようである。その様子は、「千壺平面埴輪配列ノ圖」や「埴輪並列ノ圖」と題したスケッチによっても知られる。

埴輪の配列については、

總計四段あり。……　第一郭は環状にして後部の頂上に在り、徑り九間二尺にして予が算せし總數百十七個あり、舊來は尚多かりしならん、埴輪間の距離は前面最も接近せる處平均五寸に過ぎず……第二列以下第三第四は古墳の形状に随いて三重に廻らせり。……全躰の總數は素より概算し難しと雖も、惟ふに二千は下らざる可し。

としている。「四段」というのは、「千壺平面埴輪配列ノ圖」にあるように、前方部墳頂の埴輪列が後円部にまで同じ高さで巡っているように、やや勘違をしたようで、後円部が4段に描かれている。後円部墳頂の埴輪列が円形で、その直径が「九間二尺」とあるから16.7mになるが、発掘調査で確認された埴輪列の直径は、およそ30mで、全く異なっている。当時

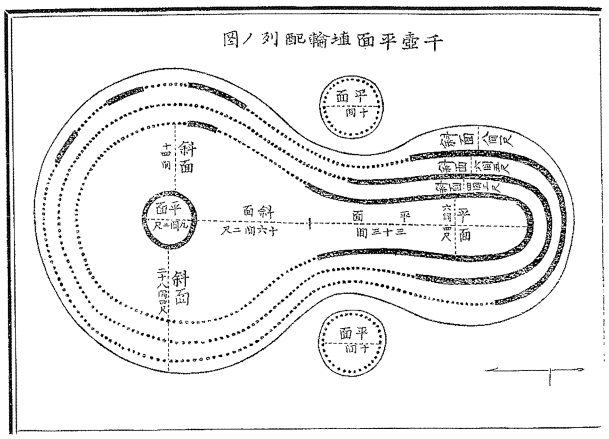

図２－３　千壺平面埴輪配列ノ圖（八木1894）

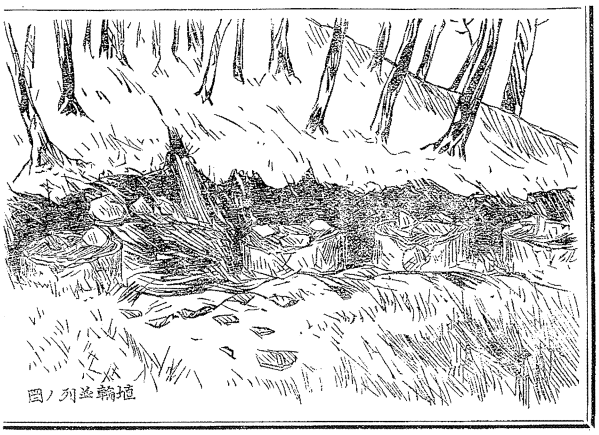

図２－４　埴輪並列ノ圖（八木1894）

全くの誤謬から生まれたものか、あるいは整備に伴う発掘調査時には、すでに削平され知り得なかった内側の埴輪列が存在したものか、定かではない。ただ、直径16.7mでは円周52.4mとなり、樹立する埴輪の数が「總數百十七個、舊來は尚多かりしならん」では数量的に多すぎるし、その配列が方形であれば可能性は高いが、円形で二重の埴輪列は類例を知らない。しかし、八木は「此孔部に就いて尚記載せんに、予が見たるものは皆下部六寸以上の處に在りて、その方向は塚の中心に對して方光状なり」と透孔の位置や方向性、「埴輪間の距離は前面最も接近せる處平均五寸に過ぎず」と埴輪間の距離など詳細に検討を加え、古墳全体に樹立する埴輪の総数を「惟ふに二千は下らざる可し」とし、今日発掘調査によって得られた資料を基に計算された「2200本」に、ごく近い数量を推算している。

五色塚古墳は、海岸沿いの景勝の地にあり、しかも街道沿いであったことから、訪れる人も多く、埴輪の発掘や盗掘が多かったようで、すでに明治時代において笹川種郎は、次のように憂えている（笹川　1887年）。

> 往來ノ旅客此所ヲ訪ヒテ陶片ヲ碎キ持チ去ル丁常ナリト實ニ惜シキ丁ナリ若シ此儘ニシテ棄テ置カンニハ終ニ盡ク碎飛離散シテ此貴重ナル古物ヲ失フベシ何トカ方法ヲ立テヽ保存アリタキモノナリ

こうして掘り出した埴輪を、当時の人々はどのようにしていたのか興味深いところである。当然、研究者は資料として保管していたのであろうが（奈良文化財研究所　2002年、京都大学文学部博物館　1968年）、上月豊蔭なる人物のおもしろい記事が「西摂大観　郡部」（仲　1911年b）に引用されている。

> 壺のおほかたはそこなわれたるが中よりやゝかたちのまたきをかろうじてもとめ得て年ごろひめもたりしを去年の春こひえてわが友林ぬしにまゐらせけるにぬしは茶伯にしおわすればやがてさるべきさまにつくろひなしてこたひ風爐にものして愛でらるゝを見ればその形のをかしうめづらかなるのみならず……

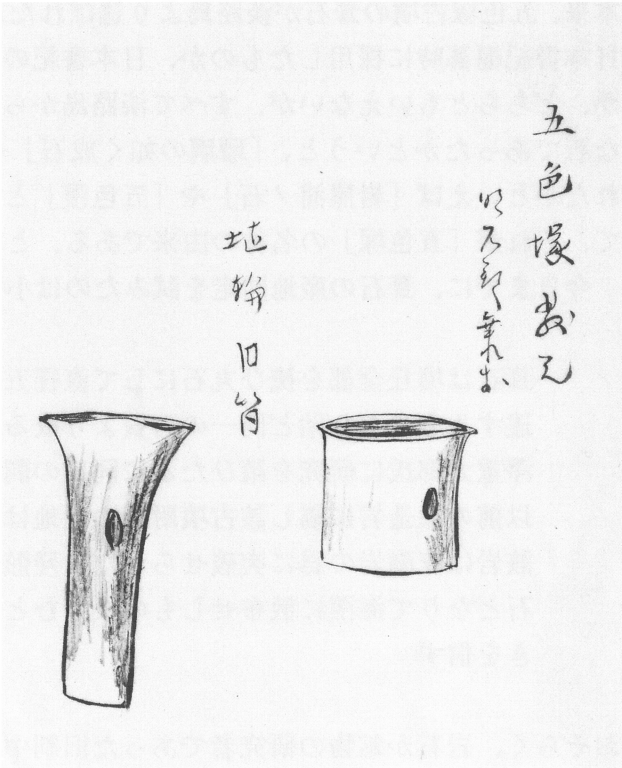

図2－5　五色塚発見　埴輪円筒

須恵器等を茶器に再利用するのは「千利休破笠友蓋香炉」をはじめ、数多く知られているが（田辺　1981）、円筒埴輪を風炉に仕立てるなど、思いもよらぬ再利用である。

発掘した埴輪を、墨書のスケッチで残している例もある（滑川友市　1911年）。

五色塚古墳の図とともに「五色塚発見」「埴輪円筒」と記して、円筒埴輪基底部と形体不明の円筒部を描いている。

4. 葺石について

葺石についての記述の興味は、どこからどのような石が運ばれてきたかが主である。

「仍編船絙于淡路嶋、運其嶋石而造之」
「日本書紀」
「淡路島より瑠璃の如く成石をはこひ陵の上に積重ね」
「日向大明神の社記」『播磨鑑』所収
「今黒圓小石壘々……　以淡路島五色小石築塚名因之也未知然否」
「明石郡志」『播磨國千壺取調報告（承前）』所収
「衆船ヲ編ミ淡路ニ絙シ同國岩屋浦ノ石ヲ送リ以テ是ヲ築キ」
「播磨千壺」　藤井忠　1886年　東京人類學會
「淡路國五色濱より此處に敷ける圓形の小石を運ばしむ」
「西摂大観」上巻　仲彦三郎　1911年
「葺石は墳丘全部を掩ひ丸石にして直徑五寸乃至六七寸のもの最も多く稀には一尺に達するものあり殆ど同一の石質より成る。石質竝に産地に就いて…　英雲閃岩にして…　該古墳附近の産地は淡路岩屋より東海岸を楠本に至る間に在り」
「五色塚（千壺）古墳」『兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯　小西孝四郎　1923年

本来、五色塚古墳の葺石が淡路島より運ばれたというのは、この地域の伝承であったのを、日本書紀編纂時に採用したものか、日本書紀の記事を地域の人々が伝承にしてしまったのか、どちらともいえないが、すべて淡路島から運んだこととされていて、それはどのような石であったかというと、「瑠璃の如く成石」や「五色小石」で、淡路島のどこから運ばれたかといえば「岩屋浦ノ石」や「五色濱」というように脚色されていくのである。そして、それが「五色塚」の名称の由来である、と理由づけられていくのであろう。

今日までに、葺石の産地同定を試みたのは小西孝四郎（小西　1923年）のみである。

葺石は墳丘全部を掩ひ丸石にして直徑五寸乃至六七寸のもの最も多く稀には一尺に達するものあり殆ど同一の石質より成る。石質竝に産地に就いて洲本中學校教諭松澤重太郎氏に研究を請ひたるに同氏の調査に因れば岩質は英雲閃綠岩にして花崗岩以前の深造岩に屬し該古墳附近の産地は淡路岩屋より東海岸を楠本に至る間に在り該岩は花崗岩の爲に突破せられたる殘骸の一部露出せるもの海水侵蝕の爲に破碎玉石となりて海濱に散布せしものならむとの事にして余も此海岸を踏査して其然る可きを信ず

おそらく、岩石か鉱物の研究者であった旧制中学校の教員に依頼し、その結果、淡路島の中でも、最も五色塚古墳に近い津名郡淡路町岩屋から東海岸沿いに南へおよそ5kmの東

浦町楠本までの間の海岸に散布している英雲閃緑岩であるとしている。

5. 墳丘規模について

墳丘規模についての記述は少なく、はじめに取り上げたように「金波斜陽」に、「境内百十八間、七十四間」とあり、およそ215m×135mで、濠を含んだ規模にほぼ近い値を出している。詳細な調査を実施した八木は、各部分の寸法を平面図に記入している（八木1894年a）。それによると、後円部の半径は三十三間で、およそ60mになり、発掘調査結果による半径62.5mに非常に近い値である。全長については明確な値が示されていないが、記された各部の値をつなぎ合わせると、九十六間八尺となり、およそ176mで、発掘調査結果による全長194mとは20m近くも誤差がでている。

八木の平面図には周濠が描かれていないが、濠の形状を明瞭に描いている例もある（滑川　1911年）。「五色塚　偽説仲哀天皇御陵　面積八反　環溝巾六間」とあり、鍵穴形の周濠が描かれている。現在、山陽電鉄の軌道敷になっているため、全く不明の前方部南面の濠が明確に描かれており、濠は古墳の周囲を巡っている。周囲に道路や宅地が存在しない時期の、濠の形状を表すもので、五色塚古墳築造時の周濠の形状を考える際の資料として、最も参考にすべきものの一つと考えるが、同じ滑川の編纂にかかる「明石郡古墳分布圖」『兵庫縣古墳分布郡別圖（播磨国）』では盾形に近い形状に描かれている。後に別人が筆写していることから、いずれとも言い難い。

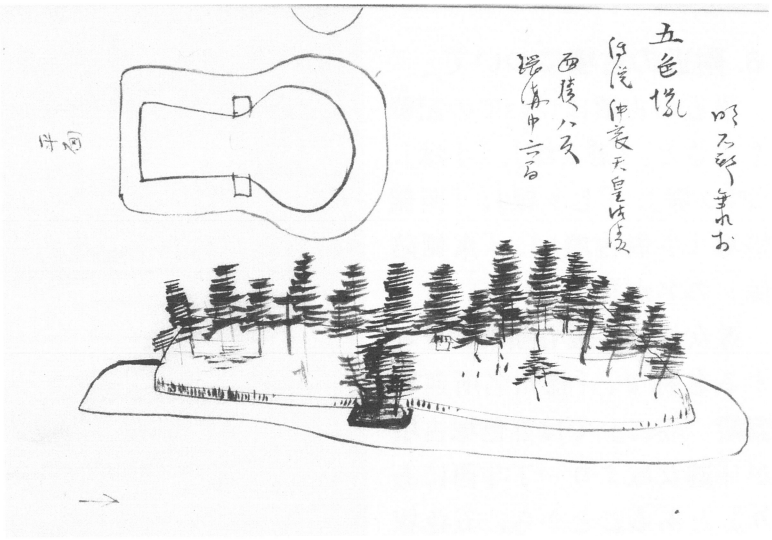

図2－6　五色塚　偽説仲哀天皇御陵（滑川1911）

その後、小西の調査では現地で測量することなく「地圖に因りて測定すれば、後部外濠よりの東西直径は約八十四間にして、南北は電車線路の南に及べば、約百二十間餘に達すべし。前方部の高さは約六間、後方部の高さは約十間にして……」とある（小西1923年）。「地圖」の縮尺がどの程度であったか不明であるが、濠を含んで後円部の直径は152.7m、全長は218.2mであ

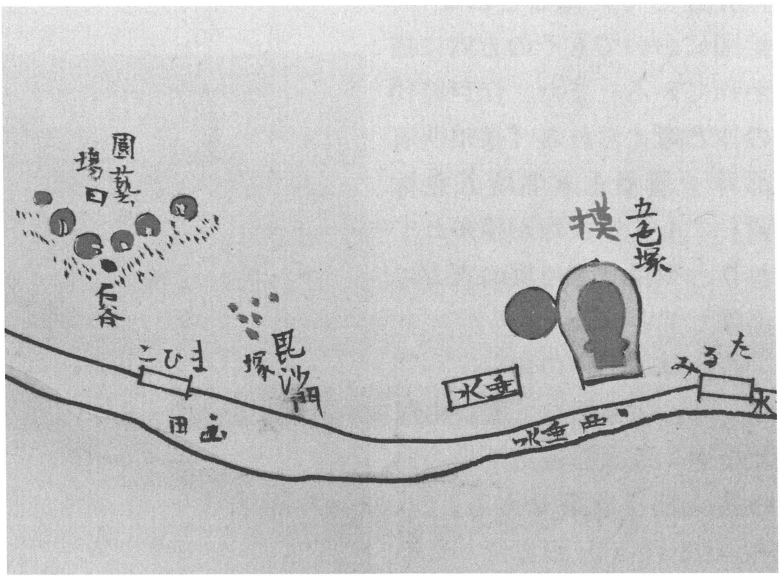

図2－7　明石郡古墳分布圖（滑川1913）

るから、ほぼ正確な数値である。ただ、小西の記述で気になる点は「後部外濠」で、内・外の表現を意識していたなら、近年の周辺の調査で明らかになった周濠に併行して巡る小規模な溝の存在を認識していたのかということである。

太田は、実地測量か、地図によるのか不明であるが、「明確な實測圖は今日尚發表されてゐない。後圓徑約一五三米南北約二二五米、環湟は後圓部周圍に明らかに殘存してゐる。」とし、先の小西の数値に近く、濠を含んでいるとすれば、これもまたほぼ正確な数値である。

図２－８　播州名所巡覧圖繪

6. 附近の古墳について

附近の古墳についての記載を見ると、「遊女塚」、「小塚」、「四ッ塚」、「七ッ塚」、「西側陪塚（小壺古墳）」、「東側陪塚」の名が挙げられている。

遊女塚は、最も頻繁に登場する名称で、「播州名所巡覧圖繪　巻二」では五色塚古墳が「遊女塚より一丁斗西にあり」とあることから、五色塚古墳の東およそ100mあたりに存在していたことになり、絵図においてもその方向に描かれている。また、江戸時代の作と考えられる「播州明石郡舞子濱續垂水名所五色塚圖」にも、遊女塚が描かれており、やはり五色塚の東方に位置している。

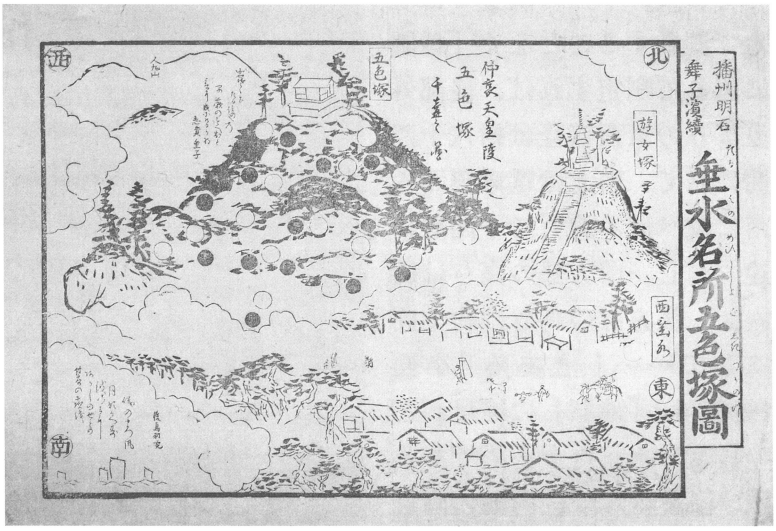

図２－９　播州明石郡舞子濱續垂水名所五色塚圖

八木は「千壺の側ら又一荒陵あり、古來傳へて遊女の塚となす、此塚曩鐵道工事の爲め其一部を截斷せらる」（八木　1894年a）、福原は「その東南に在りし遊女冢は鐵道敷

設の際に破壊し」(福原　1921・1929年)、「此の塚の南に遊女塚と呼べる陪塚ありて……此の塚は明治二十五年山陽鐵道敷設の際取り潰したり」(福原　1932年)としていることから、遊女塚は、五色塚古墳の東南に存在したが、明治25年鉄道敷設工事のために破壊消滅したことがわかる。方向と鉄道の位置から考え合わせると、五色塚古墳前方部の真東よりやや南寄りの、100mほど離れた地点に存在したと推定される。福原の記述年代と合致しないが、明治21(1887)年10月2日の「神戸又新日報」の記事には以下のような記述がある。

> …今度山陽鐵道の線路は恰も右遊女塚の傍を横斷せるに付先頃凡そ一丈計りもその土地を掘り下げたる処銅類を以て鋳造せる如き蛤蜊貝幾個ともなく顕出し其大なるものは百二三十目より小なるは三拾目位までの目方あり形容は孰も同一にして裡面は砂利交じりの赫土を以て填充周囲は銅鐵類にて包あり慥かに摸型を以て鋳造したる痕路あれども悉く酸化して黄色に變し少しも黒き色を止めず如何にも不思議なるものなれば攷古學者の示教を俟て其年代作用等を知りたき者なり…

遊女塚が消滅した年代は、福原の記憶違いで、正しくは明治21年であろう。しかし、記事中の「銅類を以て鋳造せる如き蛤蜊貝幾個ともなく顕出し」とは、思い当たる遺物がなく、遊女塚が古墳であった確証は得られない。

次に小塚であるが、その位置について記したものは見あたらないが、八木の報文中(八木　1894年a)に「第二圖　播磨國明石郡舞子驛千壺ノ景」というスケッチがあり、その図の中央に前方後円墳と認識できる、松に覆われた五色塚古墳が描かれ、その右端に海と淡路島と思われる景色が描かれている。このことから、五色塚古墳を西ないし北西から見たスケッチであることが解る。文中に、このスケッチは「小塚の方より見たる處」とあることから、小塚は五色塚古墳の西ないし北西に存在していたであろうと推断でき、その位置には小壺古墳が存在することから、「小塚」=「小壺」と考えてよいのではないだろうか。

四ッ塚、七ッ塚については、全くその位置を推定する術がないが、太田(太田　1931年)が言う「東方陪塚」は、その表現から、五色塚古墳を挟んで小壺古墳とは対称的な位置にあったようにも思える。「神戸地方古墳地名表」によると、この「東方陪塚」は「姫塚」と呼称されていたようである。

滑川の「標注播磨風土記附摂播古墳鑑」には、近景と遠景の平面図があるが、五色塚古墳近辺には、いずれにも小壺古墳以外の墳丘らしきものは描かれていない。同じ滑川編纂で、前掲の「兵庫縣古墳分布郡別圖(播磨国)　明石郡古墳分布圖」(滑川友市編纂

図2-10　播磨國明石郡舞子驛千壺ノ景(八木1894)

1913年）にも、小壺古墳のほかに周辺には古墳は描かれていない。

また、小西は「前方部南西隅に一」つあるとしている（小西　1923年）。真偽は不明であるが、五色塚古墳周辺には、今はその存在が確認できない古墳が、かつては何基か存在していたのであろう。

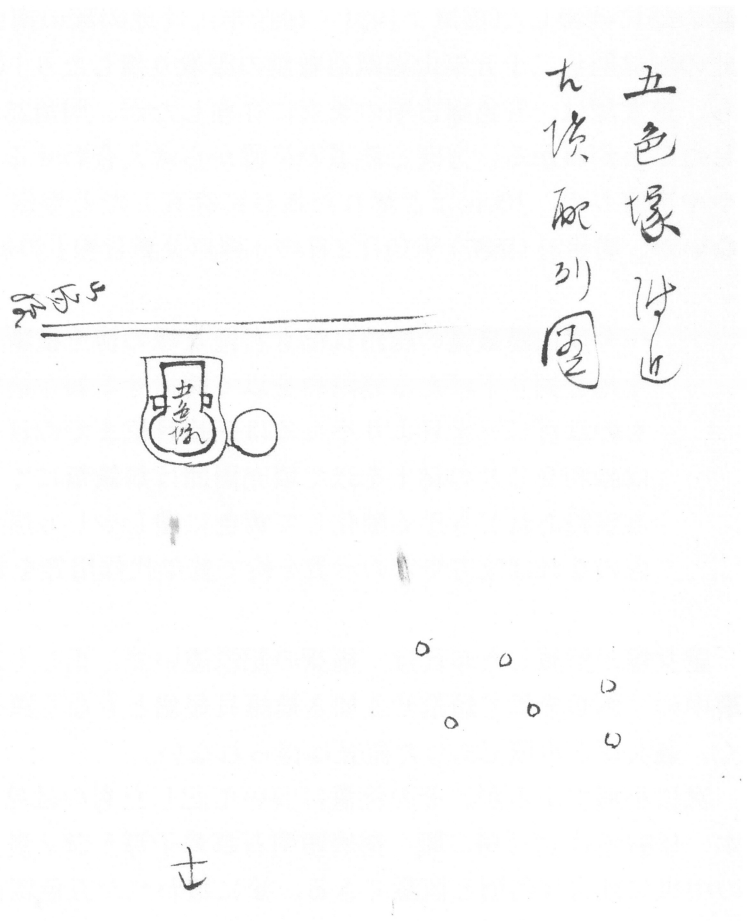

図２－11　五色塚付近古墳配列図（滑川1911）

7. 濠の中の島状遺構

濠の中の島状遺構については、八木と小西が取り上げている。八木の観察によると、「中間別に墳然として隆起せるは、倍塚にして其左右に在り」「腹部左右の倍塚にも埴輪円筒の並列しありし事、今尚ほ古老の傳ふるものあり、予が調査の際は其實物を認めざりし」とし(八木　1894年a)、小西は「該古墳の中央最狹部左右に陪塚各一」としている（小西　1923年）。いずれも「濠中」とは記載していないが、その表現から類推して、それを指すと考えられ、またいずれも陪塚と考えていたようである。八木の平面図によると（図２－10)、それは円形で、直径十間と記されている（八木　1894年a)。発掘を伴わない観察であるから、円形に見えたのであろう。また、「播磨國明石郡舞子驛千壺ノ景」の西側くびれ部附近には、明確にその高まりが表現されている。「十間」はおよそ18.2mであるから、整備に伴う発掘調査時の一辺約20mの数値とほぼ合致する。また、「予が調査の際は其實物を認めざりし」が、古老の話によれば、その上にも円筒埴輪並べられていたとあり、江戸時代の終わり頃まで、濠中の島状遺構にも円筒埴輪の樹立していることが認識できたということであろう。

江戸時代の作と考えられる「播州明石郡西垂水　仲哀天皇陵　五色塚千壺之繪圖」では、池の中に浮かんだ島が描かれているが、詳細に観察すると、大きな後円部に矮小化された前方部が描かれ、後円部には葺石と判断できる黒丸が並べられ、埴輪列を表現したと思われる横方向二段に白丸（元は朱で彩色してあるよう）が並べられている。そして、東側くびれ部に相当する部分には、小さな島があり、濠中のマウンドの表現と考えられる。なお、後円部東側の一段目か二段目のテラスのあたりに小円丘が描かれているが、何を表現したものか思いあたるものはない。ただ、その方向の濠中には、「東北マウンド」と呼び慣わしている、方形墳丘状の高まりの存在したことが発掘調査で確認されている。

前掲の「標注播磨風土記附摂播古墳鑑」（図２－６）の平面図と側面図には、両くびれ部に

方形のマウンドが描かれている。古墳本体に接続し、造り出し状に描かれているが、調査結果に最も近い形状のマウンドである。

また、同じく前掲の「兵庫縣古墳分布郡別圖（播磨国）明石郡古墳分布圖」（図2-7）の「五色塚」を見ると、両くびれ部分に前方後円墳本体と連続した状態で、造り出し状のものが描かれている。

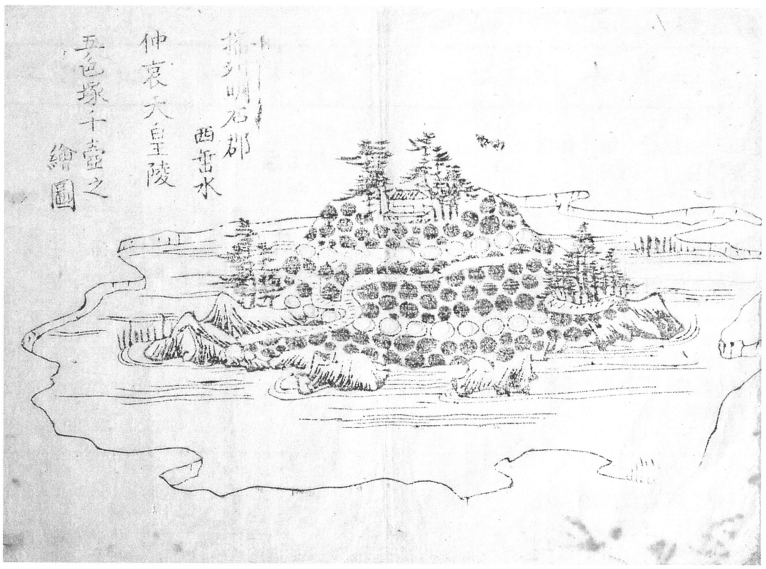

図2-12　播州明石郡西垂水　仲哀天皇陵　五色塚千壺之繪圖

整備に伴う発掘調査では、西側くびれ部付近は攪乱が著しかったようで、明確には検出し得ていないが、部分的に写真や図で確認でき、また八木・小西等の記録からも、くびれ部濠中の東西の対称的な位置にマウンドが築かれていたことは確実である。

以上、日本書紀から昭和40年の整備に伴う発掘調査までの間に残された様々な記録から、引用を多用し、五色塚古墳がどのように理解されてきたかを通観した。

五色塚古墳は、江戸時代の絵図にも名所として取り上げられる、街道沿いの景勝の地に築かれていること、日本書紀の「偽陵」という記述から、天皇陵あるいは陵墓参考地として取り扱われることがなかったことから、研究者・郷土史家によって多くの記録が残されたということができよう。それだけに破壊を伴う行為も多かったようであるが、大きく墳丘を損ねることは、前方部東南隅が鉄道敷設のために削り取られる以外なかったようで、第二次世界大戦ころまでは、松林として保護されてきたのである。

しかし、戦中には松の根を掘り起こし松根油を採取し、戦後は食糧難から葺石がはがされ、墳丘は棚田状に造成され、畑地となって荒廃していった。

表２－１　古文献中の五色塚古墳（１）

書　　名	名　　称	墳丘規模	埴輪・葺石
周垣成就記　細井知愼 元禄11年　1698年	五色塚千壺		都合三匝り程
明石記（金波斜陽） 享保4年　1729年	廟陵 俗號五色塚	境内百十八間、 七十四間	黒色丸形石積疊至桙如小壺物如車輪埋壺徑可一尺周廻松生
日向大明神の社記 （播磨鑑 平野庸修編纂　寶暦12年 1762年 所収）	五色塚		淡路島より瑠璃の如く成石をはこひ陵の上に積重ね廻りに數百の壺をすへ五色の花をさしぬ
播州名所巡覧圖繪　巻二 享和3年　1803年	千壺		周圍壹尺五寸許の陶壺數百ばかり車輪のごとく埋て幾重も志かり
明石郡志　大田舟虚 （播磨國千壺取調報告（承前） 八木奘三郎　所収）　江戸？	五色塚		今黒圓小石壘々塋域相環陵上埋瓶數百千土人言昔曰瓶中挿五色花或謂以淡路島五色小石築塚名因之也未知然否
播州明石郡西垂水仲哀天皇陵 五色塚千壺之絵図　江戸？	五色塚千壺		
垂水名所五色塚圖　江戸？	五色塚		
兵庫縣管内地誌略 藤井忠弘・長野一枝 明治12年　1879年	五色冢		
播磨地誌略　春山弟彦 明治12年　1879年	山陵	兆域頗大ナリ	
東京人類學會報告第二巻第九號 播磨千壺　藤井忠　明治19年 1886年　東京人類學會	千壺		衆船ヲ編ミ淡路ニ紐シ同國岩屋浦ノ石ヲ送リ以テ是ヲ築キ～　素焼瓶ニテ丘陵ヲ巻ク丁螺旋ノ如ク其數實ニ幾千ナルヲ知ラズ形姿各一様ナラス鍔ノ有ルアリ亦異形ナル耳アルアリ
東京人類學會雑誌第三巻第二十一號 播磨ノ塚穴及ビ千壺ノ事 笹川種郎 明治20年　1887年	千壺		車輪状ニ壺ヲ埋メアルハ充分觀察スルノ暇ナカリシモ其頂上及ビ二層目ニ一尺乃至二尺ヲ隔テ、直徑一尺計ノ壺ヲ埋メタルヲ見タリ
東京人類學會雑誌第十巻第百四號 播磨國千壺取調報告 八木奘三郎 明治27年　1894年	千壺	図参照	總計四段あり。～　第一郭は環状にして後部の頂上に在り、徑り九間二尺にして予が算せし總數百十七個あり～ 第二列以下第三第四は古墳の形状に随いて三重に廻らせり。～　全躰の總數は素より概算し難しと雖も、惟ふに二千は下らざる可し。～　古墳の全躰盡く一尺内外の黒き楕圓石を以て幾重にも築きある～

被葬者	付近の古墳	その他	
		壺に五色の花を生じたる故也と云ふ	
仲哀帝の陵といふも誤り也。	遊女塚より一丁斗西にあり	垂水も昔は四方に堀有し成るべし	
偽陵			
		往來ノ旅客此所ヲ訪ヒテ陶片ヲ碎キ持チ去ル丁常ナリト實ニ惜シキ丁ナリ若シ此儘ニシテ棄テ置カンニハ終ニ盡ク碎飛離散シテ此貴重ナル古物ヲ失フベシ何トカ方法ヲ立テヽ保存アリタキモノナリ	
	千壺の側ら又一荒陵あり、古來傳へて遊女の塚となす、此塚曩鐵道工事の爲め其一部を截斷せらる、～ 現今千壺の近傍前記遊女塚の外、小塚、四ッ塚、七ッ塚等あり、第二圖「播磨國明石郡舞子驛千壺ノ景」というスケッチは図の右端に海と淡路嶋と思われる景色が描かれている。このことから、五色塚古墳を西ないし北西から見たスケッチであることがわかる。本文中に「小塚の方より見たる處」とあることから、小塚は小壺古墳と考えてよいのではないか。	中間別に墳然として隆起せるは、倍塚にして其左右に在り。予の見る處を以てすれば、小塚又は遊女塚の如きも、矢張り倍塚の内ならんかと思へども、遊女塚の方は一も埴輪の殘片を見い出さざる～ 此外腹部左右の倍塚にも埴輪円筒の並列しありし事、今尚ほ古老の傳ふるものあり、予が調査の際は其實物を認めざりしも、	發掘せし總數は實に鮮なきにあらず。而して尤も能く舊形を認めしは古墳の前面即ち海に臨みし場處なりとす。

表２－２　古文献中の五色塚古墳（２）

書　　名	名　　称	墳丘規模	埴輪・葺石
東京人類學會雜誌第十卷第百五號 播磨國千壺取調報告(承前) 八木奘三郎　明治27年　1894年	然れ共等しく供ふるに五色の絁帛を用ゆ、其他諸社の祭典にも亦必ず之を用ゆ。去れば千壺に五色塚の口碑あるは、或は斯る點に基くにはあらざるなきか。		
考古學會雜誌第壹編第貳號 舍人皇女檜笠岡御墓考　吉永悦卿 明治30年　1897年	千壺		
考古學會雜誌第壹編第五號　舍人皇女檜笠岡御墓考を見て思へる事ども 和田千吉　明治30年　1897年	千壺		拳大の丸石の敷設も乱れず
千壺風爐の記　上月豊蔭 明治31年　1898年 (西摂大観　郡部)	千壺		底なき壺の形みなおなしきか、こゝかしこにかすしらすいとおほく土中よりぞあらわれたるこれによりて千壺とはいふなり
西摂大観　上巻 明治44年　1911年 仲彦三郎編	五色塚		淡路國五色濱より此處に敷ける圓形の小石を運ばしむ 而して遶らすに四重の埴輪を以てす
西摂大観　郡部　明治44年 1911年　仲彦三郎編	五色山千壺		
歴史地理第参拾八巻第参號 兵庫縣明石郡垂水村西垂水五色山古墳に就いて　福原潜次郎 大正10年　1921年	五色山古墳 五色冢 千壺 甑冢　古へ甑冢とよび來たるものを、何時とはなしにゴシキと一音を濁りたるより、五色の字を用ひたる～ 此程完成したる埴輪こそ久しく疑問たりし、所謂鍔あり耳あるもの、正體を明かにし、其器が甑たることを認むるに至ったのである。		
兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告書 第一輯　五色塚(千壺)古墳 小西孝四郎 大正12年　1923年	五色塚（千壺）古墳 五色塚古墳	地圖に因りて測定すれば、後部外濠よりの東西直径は約八十四間にして、南北は電車線路の南に及べば、約百二十間餘に達すべし。 前方部の高さは約六間、後方部の高さは約十間にして～	埴輪円筒は徑一尺にして～　三列に配置せられ埴輪との間は五寸乃至に二尺を有せり。葺石は墳丘全部を掩ひ丸石にして直徑五寸乃至六七寸のもの最も多く稀には一尺に達するものあり殆ど同一の石質より成る。石質竝に産地に就いて～　英雲閃綠岩にして～　該古墳附近の産地は淡路岩屋より東海岸を楠本に至る間に在り

被葬者	付近の古墳	その他
千壺は仲哀帝の偽陵にあらず、然からば右は何人の墳墓なるや。斯る不明の荒陵に付て人物の判定を與ふるは、歴史家の任務にして、人類學上の關係する處にあらず、		現今海神社の宮司上月氏の談に拠れば寛永二年(1625年)～　予は同所後部の頂上に於て、確かに石槨の破片を實見し又其一個を持ち歸れり。去れば千壺には石棺あり、又石槨あるものと見て可なり、
明石の國造都彌自足尼の墳ならんと云ふこと違ひ有るべからずとこそ		
擬陵		周圍に池あり 壺のおほかたはそこなわれたるが中よりや丶かたちのまたきをかろうじてもとめ得て～やがてさるべきさまにつくろひなしてこたひ風爐にものして愛でらる丶～
明石國造		今も頂上に於て石槨の破片を實見し得、去れば千壺には石棺あり又石槨あるものと見て可なり
	遊女塚　此塚は元來古墳なるべし、一町半西に千壺あり、されば其倍冢たるが如し	
明石國造（石阪比賣）	遊女冢、小塚、四ッ塚、七ッ塚等數個の陪冢がある。その東南に在りし遊女冢は鐵道敷設の際に破壊し～　此の冢には埴輪の存在せず、又石槨のあらざりし事は確實である。	寛文の時代に(1661～1673)附近にある海神社の社殿を改築された時に、五色冢の後部頂上にあった大松樹一本を伐りて～　根株まで掘り採ったので、其當時石壙の一部が露はれてゐたのであらう。六七年前まで後部頂上に横一尺四五寸の縦二尺五六寸、厚さ二寸五分位の加工した絹雲母片岩のいと美しきものが放棄されてあったがいつとはなしに破壊され、今は其破片が所々に散亂してゐる。
麝坂忍熊王の仲哀帝の爲に築きたる山陵なり	該古墳の中央最狹部左右に陪塚各一前方部南西隅に一、都合三個の陪塚あり。	

表２－３　古文献中の五色塚古墳（３）

書　　名	名　　称	墳丘規模	埴輪・葺石
垂水誌　垂水村役場 大正12年　1923年	千壺 （又五色塚とも云ふ）		直径一尺から一尺八寸ばかりの円筒の様な埴輪を幾重にも螺旋系に埋め、又直径三寸ばかりの球の様な石を澤山丘の上一面に敷きつめて居る。
兵庫史談第四拾八號　兵庫縣明石郡垂水村西垂水五色山古墳に就いて 福原潜次郎　昭和4年　1929年 （歴史地理第参拾八巻第参號と全く同文）	五色山古墳 五色冢 千壺 甑冢　古へ甑冢とよび來たるものを、何時とはなしにゴシキと一音を濁りたるより、五色の字を用ひたる～　此程完成したる埴輪こそ久しく疑問たりし、所謂鍔あり耳あるもの、正體を明かにし、其器が甑たることを認むるに至ったのである。		五色山古墳 五色冢 千壺 甑冢　古へ甑冢とよび來たるものを、何時とはなしにゴシキと一音を濁りたるより、五色の字を用ひたる～　此程完成したる埴輪こそ久しく疑問たりし、所謂鍔あり耳あるもの、正體を明かにし、其器が甑たることを認むるに至ったのである。
考古学第二巻第四號　有鰭埴輪圓筒 太田陸郎　昭和6年　1931年	五色塚	明確な實測圖は今日尚發表されてゐない。後圓徑約一五三米南北約二二五米、環湟は後圓部周圍に明らかに殘存してゐる。	特異形状を作る第一條件たる鰭は第一帯（最大帯）から始まって居り何處で終ってゐるかは不明であるが、圓筒の高さは約七八十糎にも及んでるものではあるまいか、そして突帯は第三帯であって上部迄附着してゐる様に思はれる
考古學雜誌第二十三巻第四號 播磨明石郡垂水の五色山古墳は擬塚なりとの説　福原潜次郎　1932年	五色山古墳 五色塚　此塚上に於いて偶甑の全形を見て塚の形が甑に似たることを知り塚の名の五色は甑塚なることを知り得たのである		
山内清男考古資料13　P.155（注11） 平成14年　2002年	千壺		
神戸の文化財 昭和31年　1956年	五色塚（千壺）古墳		
祖先のあしあとⅡ 昭和35年　1960年			

被葬者	付近の古墳	その他
明石國造(石阪比賣)	遊女冢、小塚、四ッ塚、七ッ塚等數個の陪冢がある。その東南に在りし遊女冢は鐵道敷設の際に破壊し～　此の冢には埴輪の存在せず、又石槨のあらざりし事は確實である。	寛文の時代に附近にある海神社の社殿を改築された時に、五色冢の後部頂上にあった大松樹一本を伐りて～　根株まで掘り採ったので、其當時石壙の一部が露はれてゐたのであらう。六七年前まで後部頂上に横一尺四五寸の縦二尺五六寸、厚さ二寸五分位の加工した絹雲母片岩のいと美しきものが放棄されてあったがいつとはなしに破壊され、今は其破片が所々に散亂してゐる。
	五色山西側陪塚(小壺古墳)　～本古墳で昨秋京都の某が直弧文様のある埴輪の破片を發見したことを確聞する。 東方陪塚　現在では古墳は亡びてゐるが、神戸福原氏の言によると此古墳にも亦有鰭圓筒があったらしい。	
偽陵	此の塚の南に遊女塚と呼べる陪塚ありて～ 此の塚は明治二十五年山陽鐵道敷設の際取り潰したり。この際工事に當れる土地の人は注意を拂ひしも何等埋蔵の遺物を見ず～	百五、六十年前のことであるが～　塚の上に三抱えもある大松樹があって、ある年大風のため根諸共に仆れた～　當時の實見者の話の傳へによれば啻山土の固めたるものの上に三尺に二尺厚さ八寸許りの平板石のありしを見たるのみ、此石は取り出して小祠を建てたる際其側に置きたりといふも殘り居たるが此の石は絹雲母片岩にて作れるものにていと柔らかにて美しきものなれば目につき安くために今は悉く持ち去られ跡方もなくなれり。
明石國造		

〈引用・参考文献〉

「摂津名所地図」明暦3年 1657年（神戸市立中央図書館所蔵）
「西海筋海路図屏風」寛文8年 1668年（神戸市立博物館所蔵）
細井知慎「周垣成就記」元禄11年 1698年
「金波斜陽」享保4年 1729年（「播磨鑑」平野庸修編纂 寶暦12年 1762年 所収）
「日向大明神の社記」（「播磨鑑」平野庸修編纂 寶暦12年 1762年 所収）
「播州名所巡覧圖繪」巻二 享和3年 1803年
大田舟虚「明石郡志」（「播磨國千壺取調報告（承前）」八木奘三郎 所収）
「播州明石郡西垂水仲哀天皇陵五色塚千壺之絵図」（神戸市立博物館所蔵）
「播州明石郡舞子濱續垂水名所五色塚圖」（神戸市立中央図書館所蔵）
藤井忠弘・長野一枝「兵庫縣管内地誌略」明治12年 1879年
春山弟彦「播磨地誌略」明治12年 1879年
藤井　忠「播磨千壺」東京人類學會報告第二巻第九號 明治19年 1886年 東京人類學會
笹川種郎「播磨ノ塚穴及ビ千壺ノ事」東京人類學會雑誌第三巻第二十一號 明治21年 1887年
「遊女塚の掘出し物」神戸又新日報 明治21年10月2日 1887年
八木奘三郎「播磨國千壺取調報告」東京人類學會雑誌第十巻第百四號 明治27年 1894年a
八木奘三郎「播磨國千壺取調報告（承前）」東京人類學會雑誌第十巻第百五號 明治27年 1894年b
吉永悦卿「舎人皇女檜笠岡御墓考」考古學會雑誌第壹編第貳號 明治30年 1897年
和田千吉「舎人皇女檜笠岡御墓考を見て思へる事ども」考古學會雑誌第壹編第五號 明治30年　1897年
上月豊蔭「千壺風爐の記」明治31年 1898年（西摂大観 郡部 所収）
仲彦三郎編「西摂大観」上巻 明治44年 1911年
仲彦三郎編「西摂大観」郡部 明治44年 1911年
滑川友市「標注播磨風土記　附摂播古墳鑑」明治44年 1911年（神戸市立中央図書館所蔵）
滑川友市編纂 若井義一筆写「明石郡古墳分布圖」『兵庫縣古墳分布郡別圖（播磨国）』 大正元年 1913年（神戸市立中央図書館所蔵）
福原潜次郎「兵庫縣明石郡垂水村西垂水五色山古墳に就いて」歴史地理第参拾八巻第参號 大正10年 1921年
細井知慎「元禄十一戊寅年諸陵周垣成就記」『勤王文庫』第参編 大正10年 1921年 大日本明道會
小西孝四郎「五色塚（千壺）古墳」『兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯 大正12年 1923年
垂水村役場「垂水誌」大正12年 1923年
福原潜次郎「兵庫縣明石郡垂水村西垂水五色山古墳に就いて」兵庫史談第四拾八號 昭和4年 1929年
太田陸郎「有鰭埴輪圓筒」考古学第二巻第四號 昭和6年 1931年
福原潜次郎「播磨明石郡垂水の五色山古墳は擬塚なりとの説」考古學雑誌第二十三巻第四號 昭和17年 1932年
神戸市徑濟局觀光課「神戸の文化財」昭和31年 1956年
神戸市徑濟局觀光課・神戸地方古墳調査保存準備の會「神戸地方古墳地名表 －旧武庫・菟原・八部・有馬・美嚢・明石の各郡－」昭和31年 1956年
神戸新聞社会部「祖先のあしあと」昭和35年 1960年
神戸市立博物館「よみがえる兵庫津 －港湾都市の命脈をたどる－」平成16年 2004年

第３章　　調査と整理作業の経過

１．調査の経過

第９章で詳述するように、五色塚古墳は昭和24年度から、その保護について継続的ではないが対策がとられてきた。しかし、その荒廃ぶりは考古学者をはじめ市民をも嘆かせるにまでなっていた。昭和38年度頃から、その保存と活用について文化財保護委員会と協議が続けられてきたが、ようやく昭和40年12月から、復元整備に向けて、墳丘の調査が開始された。これまで、公にされてきた資料では、調査の経過はほとんど触れらたことがなく、何年度にどのあたりが調査されたかさえ明確ではない。本報告を機会に、調査の推移を以下に記しておきたい。なお、この内容は実績報告書と調査参加大学生の非公式メモなどを元にまとめたものである。

昭和40年11月19日、五色塚古墳西側くびれ部付近おいて起工式が挙行され、翌12月１日から現地調査が開始された。しかし、調査体制は嘱託職員１名のみで、大学生が主体的に調査を実施していた。

調査開始前に、営業写真館から写真技師を雇用し、様々な方向から調査前写真（図版17）を撮影している。当初は15本のトレンチを設定し（図３－１）、復元整備に必要な資料を得ようとした。しかし、実際に調査を進めると、ほとんど原状をとどめていないと推定されていた墳丘斜面などが、良好に遺存していることが判明してきた。また、感想として「基本測量をした結果、きわめて精密な測量技術によったのではないかと推定される。おそらく、その築造前に地形、築造位置の精密な選定がおこなわれ、また築造工事の工程を企画したことがうかがわれる。」と記していることから、調査開始前とはかなり印象が違っていたようである。当該年度中には、15本のトレンチのうち、７本を対象に実施している。その調査の結果、濠は「空堀」であったこと、平坦面には根石から遠くないところに埴輪が立てられていること、斜面には全て葺石が葺かれていることが判明したとし、多くの成果を得ている。しかし、前方部・後円部とも「二段築成」であるとしており、誤植でなければ合点のいかない点である。

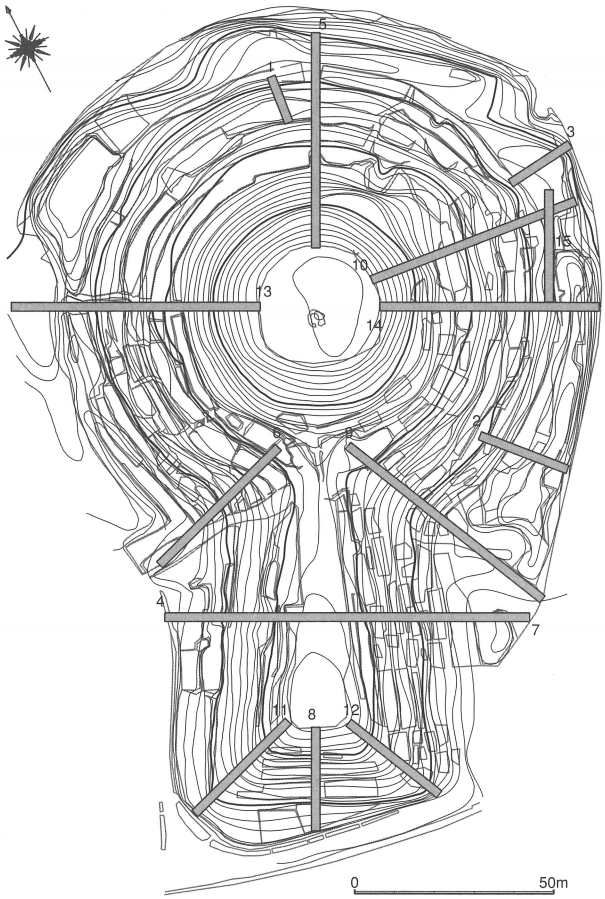

図３－１　昭和40年度調査計画図

出土品として、子持勾玉二点と石製合子（三脚の通常品と記されている）を特記しているが、収納遺物中には石製合子は見あたらない。ただ、部外者が採取したものを調査担当者が確認したという話もあり、当初から教育委員会の所蔵ではなかった可能性が高い。なお、埴輪は円筒以外蓋のみが存在するとしている。

昭和41年度は、前年度調査の結果、先述のように墳丘の残存が予想以上に良好であったため、調査方針を変更し、全面調査へと切り替えている。したがって、調査は先行する7本のトレンチと後円部西側斜面上段の葺石検出、前方部南側斜面の葺石検出と埴輪列の調査が、おおむね完了している。また、復元工事の方法を検討するため、前方部西側斜面の一部に、四種類の工法で葺石復元工事（図版21-3）を施工した。また、葺石の図化は効率化を考え、文化財保護委員会の紹介で東京大学生産技術研究所の写真測量を遺跡において初めて採用し、後円部北斜面と前方部西斜面において実施した。

昭和42年度は、復元工事の基礎資料を得るため、西側くびれ部の調査を急いだ。また、図化は平面図・立面図を前方部西側と南側の上段・中段の葺石を完了したが、前方部東側は、ほとんど未着手に終わった。下段および濠底は、前方部西側の一部および前方部南側・前方部東側の一部の葺石検出を完了したが、図化は、写真測量によることとして、委託によって完了した。

埴輪片の出土は多量で、およそ1000袋に達している。しかし、埴輪の実測および埋置状況を調査完了の上で収納したものは、前方部西側上段の一部のみで、他の地区はそれを終えていない。

葺石復元工事を実施する予定であったが、崩壊防止の技術的な方法が未解決であったこと、出土状況の図化作業が遅れてきたことで、施工するまでに至らなかった。

昭和42年度調査途中から、五色塚古墳の調査体制・調査方法について、調査補助員として参加している大学生から、疑問が呈された。当初は一大学組織による調査補助員であったのが、途中から他大学が参加したことによって、調査区が別けられ、調査方法も異なる結果となり、一遺跡内で調査方法が異なることへの反省から、昭和42年の夏期調査から一本化を目指した。しかし、結果的には失敗に終わり、その状況を分析した文書が残されている。それによると、調査の問題点は「大学間による考古学に対する姿勢の違い」と「神戸市の調査体制」と結論づけている。そして、神戸市に対して要望書を作成している。

復元工事に対する要望

〈五色塚古墳に於ける問題点〉

【Ⅰ】現在なぜ復元されるのか

イ　商業主義に乗った、夢の架け橋、万国博との関連

ロ　風土記の丘との関連

ハ　文化財保存のデモンストレーションの復元

（現在余りにも破壊が進んでいる為、国民感情を恐れる）

ニ　県単位に於いて各時代に一つ一つの遺跡を保存し、後全部を破壊するという国の動きに対しての疑問

（五色塚古墳の復元と関係あるのではないか）

【Ⅱ】体勢・五色塚自体の計画に於ける問題

イ　五色塚の調査が遅れた場合、責任主体はどこか？

ロ　国の方では、五色塚の表土をはいでいる所をみて、調査終了としている様であるが、我々はこのまま表土をはいで良いのか

（他の調査、例えばハニワ列、実測等無視される可能性）

【Ⅲ】学校単位の調査

これは、学生の調査団の内部（考え方の相違）の統一にかかる。

しかし、この要望書は提出されず、「今まで、色々総括をしてきた。しかし、学生自体常に明確にしなければいけないのは、五色塚自体を動かしているのは、我々学生であるという事を心に常に持っていなければいけないであろう。宿舎での研究会、図面検討等、我々は常になし得たのであろうか？もし、五色塚に於いて、我々が正しく下部構造を形成しているとしたら、我々自体の行動は、大なる意義を含んでいるであろう。“運動の基本になっているのは、常に我々自身である”ということを、心に明記せねばいけない。」と結んでいる。

教育委員会も、嘱託1名の調査体制では困難なことが多いと判断し、嘱託職員の1名増員を要求した。

「…五色塚古墳の復元整備工事の実施、各種文化財の解体・修理・先年出土の銅鐸保存運動等、その動向は一般的な文化活動高揚の要望とともに飛躍的に高まっている実状であります。現在実施しております五色塚古墳整備工事は国内でも例を見ない復元工事であるため、専門的な調査研究をなしつつ工事を進捗さす必要があり、従って考古学的専門知識を有する事業であります。また、最近都市開発のため土木工事あるいは、国土開発に伴う縦貫自動車道路、山陽新幹線工事等の土木工事等により、沿線の古墳などが取り壊される必要も起こってきております。然るに当委員会においては、これに従事する専門的知識を修得し、且つ古墳調査等の経験を有するものが皆無であって、文化財行政の実施に支障が起こっている状態でありますので、これに適格を有する職員1名を認められたい。…」と、その増員理由を記している。そして、正規職員1名が採用された。

昭和43年度は、復元工事に先だって、前方部墳頂に集積していた礫（葺石）を移動させたのち、全面にわたって埴輪の検出・実測・取り上げ作業を実施した。その結果、前方部墳頂東側128本、南側27本、西側128本の円筒埴輪が埋置されていたことが明らかになった。

前方部西側の上段・中段のS7ライン以南の埴輪列、および南側上段・中段の埴輪列は、すべて実測・取り上げ作業を終了し、復元工事の進行に備えた。

前方部東側については、上段・中段の埴輪列の検出・実測に努め、上段については実測を終了し、取上げ作業進行中である。なお前方部葺石の平面図は、1/20実測図が完成した。そして、前方部西側で初めて復元工事が実施された。

昭和44年度は、工事に先立って写真測量を実施したが、前方部西側では、S7ライン以北のくびれ部までの上段・中段・下段で、東側ではS10ライン以南の下段およびS7ライン以北でくびれ部までの上段・中段で実施した。また、東側のS7ライン以南の上段・中段

葺石の図化を実施した。

本年度の復元工事は、前方部西側北半部、前方部南側東半部および前方部東側の一部を復元するとともに、基本排水工事を実施した。

昭和45年度の調査は、東側の前方部と後円部の接続部分（くびれ部）までとした。調査にあたっては次の点に重点をおいて実施した。

１墳丘の端をつかむこと
２東側濠底にある高まりがどのようなものであるか追求
３埴輪と葺石の前後関係および埴輪の埋め方を追求
４トレンチを設定し墳丘の整形について追求

その結果、以下の点が明らかになったとしている。

・下段にもすべて根石は存在し、根石は１～1.5mの間隔で置き方が異なる
・下段は根石から20～30cmフラットな面をつくり、10～20cm低くなり濠底になる
・東側濠底の高まりは、本体とは離れて独立したマウンドであることをトレンチで確認
・マウンドの面する本体下段の根石は、他の部分より大きい
・マウンド葺石上に埴輪片あることから、マウンド上には埴輪列ありか
・マウンドは方形で、高さ1.5m
・埴輪掘形は各段すべて溝である
・埴輪は掘形底に置くもの、更に掘りくぼめ置くもの、土を嵩上げして置くものがある
・埴輪と葺石の関係は、葺石が先と思われる
・埴輪掘形に接して柱穴あり、西側でも平面的に確認している
・盛土の方法をトレンチで確認、中段の１/５程度が地山で他は盛土
・地山に杭跡のようなものあり。柱穴とともに築造に関係ありか

昭和46年度の調査は、前方部残余の部分と後円部東側の一部について発掘調査および復元整備を実施すべく計画した。

・東側くびれ部下段葺石は、後円部からの根石が、前方部の根石の外側に置かれており東側下段では前方部葺石が先行していたと思われる
・中段埴輪列には、埴輪掘形の溝に沿って柱穴がくびれ部まで続いている。これまで確認されているものと同様に、その間隔は5.3mである
・柱穴内には葺石と同じ石が入っており、柱を固定したと考えられる
・上段埴輪列とテラスは、くびれ部では1.5mの高低差をスロープで接続している
・東マウンドは一辺20mの方形で、祭祀の場か。築造時期は不明

ところが、当初６ヶ年事業で始められた事業が、昭和46年度でようやく前方部の調査を終える程度の進捗状況であったため、調査と復元整備方法の変更が検討されたことから、12月上旬、調査補助員として参加していた学生が無期限ストライキに入った。その結果、以後の調査と整備工事は完全に停止した。

学生の現場封鎖に対し、地域住民から文化庁長官・神戸市長・神戸市教育長宛に早期工事の完成を訴える要望書が、昭和47年１月12日付けで提出された。

昭和46年度中に、文化庁と神戸市は発掘調査と復元整備方針の変更を決定した。すなわ

ち、発掘調査は全面調査から最低限の資料を得るためのトレンチ調査へ、復元工事は「原状に復する」から「現状に盛土をし、復元する」に変更された。

昭和47年度調査は、小壺古墳の整備工事を実施するにあたり、最低限必要な幅2mのトレンチを十字に設定した。その結果、葺石は葺かれていないこと、二段築成で墳頂部と途中の小段に埴輪が樹立されていることが確認された。五色塚古墳に比べ、その残存状態は非常に悪く、トレンチ調査のみで完了し、工事が開始されたが、表土掘削中、北トレンチの西側で埴輪列が現れた。円筒埴輪の基底部が円弧をなして出土し、長さ12mをトレンチ状に調査の結果、円筒埴輪13本と家形埴輪片数点が出土した。また、東トレンチで濠の一部が検出された。濠底は平坦で、五色塚古墳の濠底よりレベルの高いことが確認された。

昭和48年度調査は、後円部の整備をするのに最低限必要なトレンチ、すなわち北・東・西とその間の各トレンチ、合計7本を設定した。その結果、墳頂部は埴輪列などから、標高33.3mで、壇状のものはなく、平坦であると考えられた。北トレンチの墳頂部中央付近で土師器のミニチュア壺や高坏が、ほぼ原位置と考えられる状態で出土した。しかし、方形の埴輪列などは発見されなかった。

上段の斜面は長く、テラス幅は前方部に比べ広い。根石は前方部と同じく二列であるが、斜面ではなく同一面に置き、そこから立ち上がった斜面は途中で傾斜変換する。

中段の一部のトレンチで傾斜変換点を確認したが、他のトレンチで確認することができず、復元には活かさないことになった。

濠の外側立ち上がりの下端を、二か所のトレンチで確認した。また、現状で確認できる堀底の高まりが何かを確認するためトレンチを設定したところ、方形のマウンド（北東マウンド）と埴輪棺を確認した。

昭和49年度調査は、西側くびれ部上段で、前方部と後円部では1.5mの高低差があるため、その接続がどのように成されているかを追求した。その結果、東側同様テラスはスロープで後円部へ登っていることが確認された。埴輪列は、そのスロープに溝を掘って立て並べられているが、溝底は階段状に掘削されている。

東側中段で確認されている柱穴を、西側くびれ部で追求したが、確認することができなかった。

下段で、結晶片岩の板石を使用し葺石状にしている部分が存在した。調査の結果、表層のみでなく、地中深くまで幾重にも積まれていることから、排水施設と考えられる。

東くびれ部の上段の一部も調査したが、二列の根石の内、外側の根石は、化粧土の上に置かれているようで、西側の調査では外してしまった可能性が考えられた。

中段埴輪列に沿って存在した柱穴は後円部側にまで続くことが確認された。この柱穴は西側には存在せず、東側のみであることが確認された。

東側くびれ部の後円部寄りの下段下には、更に短い斜面が設けられていた。くびれ部から後円部へ約2mの地点からはじまり、SEトレンチ付近までで、それに直交するダム状遺構に接続している。最下段の葺石は中・上段と同じものが使用され、ダム状遺構の葺石は下段と同じものが使用されていた。下段には、排水施設と考えられる施設が三か所存在し

たが、その用途は西側下段で確認されたもの同様、確定できない。

以上が、発掘調査開始後10年間の事業の流れと、その結果の概略である。当初、復元工事に最低限必要な資料を得るためのトレンチ調査という方針で、６ヶ年事業として開始された。しかし、予想以上の残存状況であったため、全面調査へと切り替えていった。その結果、調査体制の弱体さが、補助員として参加していた学生に負担がかかり、また大学間による調査方法や発掘調査に関わる姿勢が異なることから、幾度か反省や議論が繰り返されたようである。

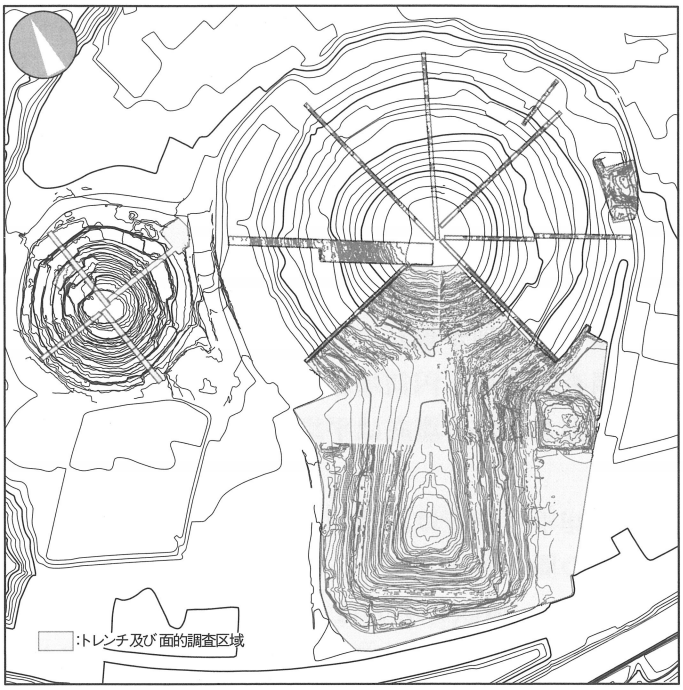

図３－２　最終発掘調査状況

その後、正規職員１名が増員されていたが、調査の進捗はさほどみられなかった。そして、６ヶ年が経過した翌年の昭和46年度、これ以後、何ヶ年が必要かという議論がなされ、全面調査では10ヶ年が必要という調査員の積算が出されたが、神戸市と文化庁が早期完工を決定したため、以後再びトレンチ調査に切り替えられることが決定された。これに対し、調査参加大学生はあくまでも全面調査を要求し、現場を封鎖した。神戸市と大学生間で議論がかわされたが、調整はつかず、昭和47年度から、最低限の復元資料を得るためのトレンチ調査が実施された。そして、小壺古墳と五色塚古墳後円部の発掘調査および復元整備工事が実施された。

年　度	事　業		教育長	部　長	課　長	係　長	調査員
	内　容	事業費(千円)					
1965(S40)	発掘調査	5,000		山内六郎(公園緑地部)	土井啓司(西部公園課)		赤松啓介
1966(S41)	発掘調査	10,000		谷口敬治(公園緑地部)	土井啓司(西部公園課)		赤松啓介
1967(S42)	発掘調査	12,000	吉野正行	中村俊郎(指導部)	笹部一良(社会教育課)	小原　勲	赤松啓介
1968(S43)	発掘調査・復元整備	12,000	宮田芳彦	中村俊郎(指導部)	笹部一良(社会教育課)	小原　勲	赤松啓介 喜谷美宣
1969(S44)	発掘調査・復元整備工事	10,000	宮田芳彦	鈴木一郎(指導部)	笹部一良(社会教育課)	大山節郎	喜谷美宣
1970(S45)	発掘調査・復元整備工事	10,000	宮田芳彦	鈴木一郎(指導部)	近藤秀男(社会教育課)	大山節郎	奥田哲通
1971(S46)	発掘調査	20,043	鈴木啓吾	笹部一良(指導部)	近藤秀男(社会教育課)	渡辺辰夫	奥田哲通
1972(S47)	発掘調査・復元整備工事	50,019	鈴木啓吾	山本治郎(社会教育部)	石田靖夫(文化課)	渡辺辰夫	奥田哲通 宮本郁雄
1973(S48)	発掘調査・復元整備工事	52,669	鈴木啓吾	山本治郎(社会教育部)	石田靖夫(文化課)	岡部　傑	奥田哲通 宮本郁雄
1974(S49)	発掘調査・復元整備工事	70,632	鈴木啓吾	山本治郎(社会教育部)	後藤淳平(文化課)	岡部　傑	奥田哲通 宮本郁雄 中村善則 丸山　潔
1975(S50)	管理事務所建設		武衛晴雄	日沖牧太(社会教育部)	後藤淳平(文化課)	岡部　傑	奥田哲通
1977(S52)	発掘調査・復元整備工事		武衛晴雄	畑岡瑞夫(社会教育部)	安田博司(文化課)	町本 欣信	奥田哲通 丸山　潔

表３－１　史跡五色塚古墳復元整備事業担当者一覧表

2. 整理作業の経過

五色塚古墳の発掘調査は、古墳としては過去に例を見ない大規模な調査であったが、検出した埴輪を全て取り上げ、持ち帰ったという点でも、前例のない調査であった。

調査後の整理作業については、昭和50年度から53年度にかけて、水洗、マーキング作業が行われていた。また一部接合作業が行われたが、大半は途中で中断されている状態であった。その後、埴輪や記録類は五色塚古墳西側濠内の仮設倉庫内に積み上げられ、外部からの資料調査にも対応できない状況で、およそ20年が経過した。そして、平成7年1月17日早朝の阪神・淡路大震災で、五色塚古墳は陥没や崩壊の被害を受け、倉庫内に積み上げられていた埴輪は倒壊した。被害を受けた墳丘は、補助金を得て復旧工事がなされたが、倉庫内の埴輪は手を着けられることなく、時は過ぎていった。

五色塚古墳の発掘調査に関わった調査員の退職や死亡により、その報告書刊行が危ぶまれるようになり、神戸市教育委員会は、文化庁・兵庫県の理解と協力を得て、発掘調査後四半世紀以上を経過し、ようやくその報告書刊行を決定した。

埴輪の整理作業

平成14年度から3年をかけ、出土埴輪の再整理を行った。調査完了から約30年を経過しているため、作業は困難をきわめた。まず、取り上げに際して命名された略称に不明なものがままあること。そして、一度整理作業がなされたが、その際の混入・誤注記などである。最初の数ヶ月は、その謎解きであった。しかし、埴輪取り上げの際に、埴輪底部内面に太フェルトペンで出土位置と取り上げ番号、および方位等々が書き記されていたことに助けられ、出土地不明品を最小限に抑えながら作業を進めることができた。

作業は、元位置より出土した埴輪底部とコンテナに収められた破片を出土位置ごとに整理することから始めた。取り上げた埴輪底部はおよそ540本、埴輪片の入ったコンテナは、28ℓコンテナでおよそ4600箱に及ぶ膨大な量であった。

接合作業は、各埴輪列の番号順に進めていった。埴輪が倒壊した際に、破片がある程度の範囲に飛散したと考えられることから、対象の埴輪の前後2～3本分の埴輪との接合関係を確認するように努めた。実際、隣り合わない埴輪の破片が接合する場合も多くあった。埴輪が倒壊した際に下方への飛散も想定され、上下各小段を跨いでの埴輪列での接合関係についても確認する必要はあるが、厖大な作業量になるため、特に必要な場合を除き行わなかった。稀に、記憶の中で関連があると思われた場合、確認をしたところ、上下の段で接合する例もあった。

接合後、補強、復元作業を行い、実測図の作成を行った。今回図化した遺物は、全て3Dのモデリングソフト（Rhinoceros）がインストールされたコンピューターに、デジタイザー（MicroScribe G2）を接続して行った。コンピューターを使用した図化は、その後トレース作業の必要がなく、レイアウト作業も画面上で行うことができる。特に古墳時代前期の円筒埴輪のように大きな遺物の場合は、原寸での実測作業が道具・用紙とも大がかりになり、コンピューターを使用した図化作業は非常に有効な手段であった。本書に掲載するにあたり、遺物の実測図はAdobe社のIllustratorデーターに変換し、編集・印刷した。

図化作業の際、同一個体と考えられる破片はできる限り図上で復元して掲載した。その際には、突帯間隔などの法量が分かるものはそれをもとに、判断できないものは平均値

（突帯間隔17.5cm・底部高35.0cm）をもとに復元した。鰭については、円筒部に接合の痕跡が認められる場合は波線で表現した。また透孔の形状は、破片なども参考にし可能な限り図化した。

整理作業の対象遺物

整理作業の対象としたのは、昭和40から49年度に発掘調査された五色塚古墳ならびに小壺古墳より出土した遺物と、昭和57年度から十数次にわたり実施された周辺部の史跡指定地外の調査で出土した遺物である。出土遺物の大半は埴輪であるが、土師器や須恵器、玉類などが少量含まれる。なお、既刊の『史跡五色塚古墳　復元整備事業概要』では、鉄斧及び碧玉製合子片の出土が報告されているが、保管されていた遺物の中にはそれらは存在しなかった。

埴輪列は、五色塚古墳では、前方部の東、西、南側及び後円部に各３段、小壺古墳では２段が確認されている。五色塚古墳と小壺古墳の埴輪列について、出土位置とその略称、取り上げ番号を（表３－２）にまとめた。なお、トレンチ名や略称、取り上げ番号は全て調査時のものである。

出土位置		略称	取り上げ番号	整理対象埴輪番号	整理埴輪数
前方部	前方部東側中段	FEⅡ	139-16	139-16	121
	前方部東側上段	FEⅢ	1-16・95-44	1-16	14
	前方部東側最上段	FEⅣ	1-38・73-58	1-5	5
	前方部西側中段	FWⅡ	0-7・34・80・87・131-135	未整理	0
	前方部西側上段	FWⅢ	1-139	未整理	0
	前方部西側最上段	FWⅣ	1-25	1-18	13
	前方部南側中段	FSⅡ	193-216	未整理	0
	前方部南側上段	FSⅢ	36	未整理	0
	前方部南側最上段	FSⅣ		未整理	0
くびれ部	東側くびれ部中段	EくⅡ	33-0	33-0	34
	東側くびれ部上段	EくⅢ	1-33	1-33	29
	西側くびれ部中段	WくⅡ	1-2	未整理	0
	西側くびれ部上段	WくⅢ	0-31	0-31	31
後円部	後円部南西トレンチ中段	BSWⅡ			0
	後円部南西トレンチ上段	BSWⅢ	4-1	4-1	4
	後円部南西トレンチ最上段	BSWⅣ			0
	後円部西トレンチ中段	BWⅡ	1	1	1
	後円部西トレンチ上段	BWⅢ	1-14	1-14	13
	後円部西トレンチ最上段	BWⅣ	1	1	1
	後円部北西トレンチ中段	BNWⅡ	2-1	2-1	2
	後円部北西トレンチ上段	BNWⅢ	2-1	2-1	2
	後円部北西トレンチ最上段	BNWⅣ	1	1	1
	後円部南東トレンチ中段	BSEⅡ	1-2	1-2	2
	後円部南東トレンチ上段	BSEⅢ	1-2	1-2	2
	後円部南東トレンチ最上段	BSEⅣ			0
	後円部東トレンチ中段	BEⅡ	1-2	1-2	2
	後円部東トレンチ上段	BEⅢ	1-2	1-2	2
	後円部東トレンチ最上段	BEⅣ			0
	後円部北東トレンチ中段	BNEⅡ	1	1	1
	後円部北東トレンチ上段	BNEⅢ	1	1	1
	後円部北東トレンチ最上段	BNEⅣ	1	1	1
	後円部北トレンチ中段	BNⅡ	1-2	1-2	2
	後円部北トレンチ上段	BNⅢ	1-2	1-2	2
	後円部北トレンチ最上段	BNⅣ	1-6	1-6	5
小壺古墳	西トレンチ	KW	125-133	125-133	8

表３－２　出土位置・略称・取り上げ番号

くびれ部とは、前方部と後円部の接点から後円部側にかけて設定された調査地区の名称で、東西に設けられている。

出土位置を示す略称は、前方部をF、後円部をB、小壺古墳をKとし、次に方位を示すアルファベットの略称、埴輪列の中・上段と墳頂部の各段をⅡ・Ⅲ・Ⅳとあらわす。以下、本文では、この略称を使用する。

取り上げ番号については、地区毎で番号をつける方向が異なるため、ここでは東西の前方部は後円部側から、前方部南側は西側から、くびれ部は前方部と後円部の接点から、後円部西半分は西側くびれ部の接点から、後円部東半分は東側くびれ部接点から、番号が始まるように統一することにした。

FSⅡ・Ⅲ・ⅣやFWⅡ・Ⅲについては、後世の削平や盗掘で良好な状態で出土している埴輪が少なく、作業の優先順位を遅らせため、全く作業が及ばない結果となった。

また、出土状況の良好な後円部側から作業を進めたFEⅢ・FEⅣ・FWⅣでは、埴輪列の途中で作業が中断しているため、整理作業の対象とした埴輪番号を表中に示した。

整理を終えた埴輪の総数は、五色塚古墳291本、小壺古墳８本の合計299本である。

地形図・遺構図・写真・日誌・関係書類の整理作業

発掘調査期間が10年間にもおよんだ五色塚古墳の調査に関する図面や書類もまた、膨大な量であった。遺構図は856面（手書き図722面、写真測量図134面）、写真は35mm、6×7cm、4×5in、5×7inなどアルバム71冊、発掘調査日誌（昭和40年～50年）はB４版及びA４版でおよそ幅150cm、関係書類は調査前の資料も含めて（昭和25年～50年）B５版でおよそ幅200cmにも及んだ。また、調査員や調査補助員が使用した野帳は、残されているものだけでも厖大な冊数である。

遺構図や地形図については、各々の接合関係を確認・確定する作業に、およそ半年を要した。それらの図面をスキャニングし、取得したラスター画像を汎用CADソフト（マイクロステーション）で、図上の基準杭をもとに国土座標への変換（回転、縮率補正）を実施したうえで、デジタルトレースを行った。この既成図数値化業務は株式会社ジオテクノ関西に委託した。本書に掲載している地形図や遺構図はそのデータをEPSデータに変換し、遺物実測図と同様にAdobe社のIllustratorで編集・印刷した。

発掘調査時撮影されたフィルムは、劣悪な環境下に20年間も保管されていたことと、調査後30年近くも経過したことから、変退色などの劣化が著しく進んでいた。それらの画像をデジタル化（Kodak Pro Photo CD 64base）し、その後変退色等を復元し、データをCDに保存する業務を株式会社タニグチフォト、株式会社堀内カラーに委託し、写真の永年保存に努めた。

遺物整理の体制

平成14年度

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）　檀上重光　工楽善通　和田晴吾

教育長　西川和機　　社会教育部長　岩畔法夫　　文化財課長　桑原泰豊

社会教育部主幹　渡辺伸行　宮本郁雄（埋蔵文化財センター所長）

埋蔵文化財調査係長　丹治康明　　文化財課主査　丸山　潔（報告書作成担当）　菅本宏明　千種　浩

事務担当学芸員　口野博史　佐伯二郎　内藤俊哉　橋詰清孝

保存科学担当学芸員　中村大介　報告書作成担当学芸員　平田朋子

平成15年度

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）　檀上重光　工楽善通　和田晴吾

教育長　西川和機　　社会教育部長　高橋英比古　　教育委員会参事　桑原泰豊（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹　渡辺伸行　宮本郁雄（埋蔵文化財センター所長）

埋蔵文化財調査係長　丹治康明　　文化財課主査　丸山　潔（報告書作成担当）　菅本宏明　千種　浩

事務担当学芸員　西岡巧次　山本雅和　佐伯二郎　内藤俊哉　橋詰清孝

保存科学担当学芸員　中村大介　　報告書作成担当学芸員　平田朋子

平成16年度

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）　檀上重光　工楽善通　和田晴吾

教育長　小川雄三　　社会教育部長　高橋英比古　　教育委員会参事　桑原泰豊（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹　渡辺伸行　宮本郁雄（埋蔵文化財センター所長）

埋蔵文化財調査係長　丹治康明　　文化財課主査　丸山　潔（報告書作成担当）　菅本宏明

事務担当学芸員　山本雅和　佐伯二郎　東　喜代秀　橋詰清孝　井尻　格

保存科学担当学芸員　中村大介　　報告書作成担当学芸員　磯崎朋子

平成17年度

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）　檀上重光　工楽善通　和田晴吾

教育長　小川雄三　　社会教育部長　高橋英比古　　教育委員会参事　桑原泰豊（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹　渡辺伸行　丸山　潔（埋蔵文化財センター所長）

埋蔵文化財調査係長　丹治康明　　文化財課主査　菅本宏明　安田　滋

事務担当学芸員　山本雅和　佐伯二郎　東　喜代秀　橋詰清孝　井尻　格

保存科学担当学芸員　中村大介　　報告書作成担当学芸員　磯崎朋子

遺物整理補助員（平成14～17年度）

芝　恵子　花房伸予　杉本恵美　西馬久美子　井守芳美　橋本千里　和田陽子

畑谷敦子　中野良栄　土居公子　三好マユミ　藤田千晴　黒田智恵子

図版作成編集補助（平成17年度）

松栄舞子　藪下通世